

解離現象の射程

—多重人格・シャーマニズム・神秘体験—

河中正彦 (感性デザイン工学科)

畠中利紹 (感性デザイン工学科)

The range of Dissociative phenomena

—Multiple Personality, Shamanism, Mysterious experience—

Masahiko KAWANAKA (Perceptual Sciences and Design Engineering)

Toshitsugu HATAKENAKA (Perceptual Sciences and Design Engineering)

Abstract:

The concept of dissociation, which French psychologist Janet has established in the research of multiple personality, is not only the matter of this phenomenon, but also of the shamanism and mysterious experience of religion. Moreover the dissociation can be found in the normal state of consciousness. Therefore this phenomenon can be the model of general human consciousness.

Key Words : Dissociative Phenomena, Multiple Personality, Shamanism, Mysterious experience, Hysteria

1. 序論

人間の心理的な働きは、謎に包まれている。精神的に自分に言い聞かせたり、思い込んだりすることにより、自分の本来の実力以上の力を発揮する。本当は熱くも何ともないアイロンを熱いと言い聞かせて皮膚に押し付けることで火傷を負わせてしまう。ただの水を万病に効く薬だと言って飲ませることで病気が治る。これらの事柄は、人間の精神の力が肉体に作用する例としてよく知られている。なぜ、このような現象が起こるのだろうか。また、人間は多種多様な場面に合わせて自分の性格を使い分けたり、嫌な記憶を忘れたり、幾つかの別の作業を同時に並行して行ったりすることができる。人間の心は一体どのようにして、このような働きを可能にしているのだろうか。このような疑問に関して、心理的に異常な状態である多重人格・シャーマニズム・宗教的神秘体験などから検討し、考察していきたいと考える。

かつてはその大部分がヒステリー（ヒステリーについては、本論文 6. ヒステリー 参照）であると見なされていた、多重人格・シャーマニズム・宗教的

神秘体験などの人間の異常な精神状態の構造は、ほとんどその謎が解明されていない。本論文は、多重人格・シャーマニズム・宗教的神秘体験、これらの現象全てを“解離”という概念の射程に収めることができると考え、それぞれについて“解離”という概念から考察することを目的としている。また、解離には、正常なものと異常なものが存在するが、多重人格は異常な解離現象の中でも最も複雑なものとして知られている。従来、シャーマニズムや宗教的神秘体験などは、多重人格とは別個のものとして扱われてきた。小林幹穂が『多重人格としてのシャーマン』（『イマージョ・特集＜多重人格＞』¹⁾ P.170～P.177）の中で、多重人格者とシャーマンの類似性について述べているが、それほど詳しく述べられているわけではなく、また、宗教的神秘体験などの他の現象との関連までは述べられていない。しかし、本論文は、多重人格と、解離現象としては多重人格よりも単純なものであるシャーマニズムや宗教的神秘体験とを比較し、その共通項や差異を見出し、相互に関連したものとして捉えることにより、そこから人間の心的世界の新しい構造モデルを構築しようとするものである。

現代社会は多種多様の情報が入り乱れ、人間も様々な状況に置かれている。そのような時代の中で、人間は心理的に多くの負荷を受ける。そして、自分自身の心についても、あまり知らないし、また、深く考える機会も少ない。本論文は、現代人が少しでも自分の心について知ることができ、自分の心について考える手助けになれば良いと考えるものである。

2. 解離

(1) その定義

解離という概念は、19世紀末にフランスの心理学者であるビネーやジャネによって確立された概念である。

序論でも述べたように解離には、一般生活において正常な人間も使用している“不適応を一切引き起こさない正常な解離”と、“不適応を増大させる病的な解離”が存在している。文献においては病的な解離について言及されており、その定義はフランク・W・パトナムによれば（『解離』²⁾ P.9 より引用）、

記述式 DSM 方式の定義

「意識、記憶、同一性、環境認識などの通常統合されている機能間の統合破壊」

催眠研究家アーネスト・R・ヒルガードの定義

「意識の特殊な一形式であって通常ならば連携しているはずの事象が相互に離散しているもの」

ルイス・J・ウェストの定義

「情報の流入、貯蔵、放出をその通常の（あるいはそうあるべき）連動関係から能動的に離脱させようとする精神生理学的過程」

など研究者により様々であるが、本論文においては、異常な解離を次のように定義する。つまり、正常状態ではなされている、知識と体験との統合と連絡とが成立していない事を1つの条件とする概念である。

(2) 正常な解離と病的な解離

初めに正常な解離とは一体どのようなものであるかについて述べようと思う。正常な解離過程によって手助けされる適応機能とその例は、フランク・W・パトナムがラドウィッグを次のように引用している（『多重人格性障害—その診断と治療—』³⁾ P.25, 26 より引用）。

「解離は、解離性ヒステリー、催眠性トランス、霊媒性トランス、多重人格、遁走状態、霊的憑依、高速道路催眠など、さまざまな形の意識変容を基底にもつ基本的な心理生物学的メカニズムである。このメカニズムは個人および種の生存のために非常に有利なものである。ある種の条件下では解離は七つの主要機能を行いやすくする。

- (1)ある種の行動の自動化、(2)仕事の能率向上と経済化、(3)和解できない葛藤の溶解、(4)現実の拘束からの逃避、(5)破局的体験の切り離し、(6)ある種の感情のカタルシスの排出、(7)群れ感覚の増強」

上記の引用における解離機能によって手助けされる適応機能を私見でまとめると以下ようになる。

【ある種の行動の自動化】

：呼吸をしたり、歩いたりといった自律的な行

為。このような行為は、負傷したときなどの特殊な状況下でなければ、意識せずに行なうことができる。

【仕事の能率向上と経済化】

：パソコンのブラインドタッチや、黙々と続けられる流れ作業などの行為。このような行為は、特に意識をしなくても作業を行なうことができる。

【和解できない葛藤の溶解】

：序論でも述べた“嫌な事は忘れる”などの行為が、これに含まれる。

【現実の拘束からの逃避】

：映画・読書・ゲーム・TVなど、集中して時間が経つのも忘れるような体験がこれに含まれる。

【破局的体験の切り離し】

：交通事故のときの軽い記憶喪失などの体験がこれに含まれる。

【ある種の感情のカタルシスの排泄】

：泣いたり、笑ったりといった感情を行動によって放出する行為。

【群れ感覚の増強】

：宗教・ブランド志向など、個人の自我をグループのアイデンティティや、個人を超えた被暗示性の中に埋没させる行為。

序論で述べた“幾つかの作業を同時に並行して行なうこと（例えば、自動車を運転しながら、助手席の友人と会話をするなど）”は、上記の【ある種の行動の自動化】と【仕事の能率向上と経済化】に関係していると考えられる。【現実の拘束からの逃避】などは、人間の心理的な働きが、時間経過の感じ方に関係しているというように考える手助けにもなる。また、このことは、子供の頃は時間が経つのがとても長く感じたなどという体験とも関係しているように思われる。

解離という防衛機制がある以上、正常人も解離体験をしているはずであるが、解離体験の中にも、よく体験されるものと、あまり体験されないものがあるようである。例えば、ついさっき友人と何について会話をしていたかを忘れるというようなことは、比較的よく体験されるだろうが、買った覚えのない洋服を着ていることに気付くというようなことは、通常は体験されないだろう。つまり、記憶や意識にも解離しやすい部分と、そうでない部分があるということになる。

また、序論で述べた“多種多様な場面に合わせた性格の使い分け”も立派な解離の適応機能である。例えば、仕事場にいるときは仕事に関係すること、そして家庭にいるときは家庭に関係することを考え、その他の事柄は基本的には意識に上がらないようにしておくというふうな、それぞれの状況に合った自分を使い分けしているわけである。しかし、このように自分自身を使い分け、他の事柄を意識しないように追い出しているとしても、例えば、仕事をしてい

話があれば家族のことを思い出さず、家族のことを考えることができる。このように、他の事柄の記憶が解離され追い出されていても、それは完全に忘却されているわけではなく、連絡がとれており、思い出そうと思えば簡単に思い出せるのである。しかし、それぞれの記憶が連絡・連携がとれなくなった場合、例えば、仕事場では家族のことを完全に忘れて、家族から電話がかかってきても、それが家族だと分からないような場合、そういう状況を病的な解離であるというわけである。

病的な解離について、『DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引』⁴⁾ (P.185~P.188) では、離性障害の項には以下の五つが記載されている。『DSM-IV』では診断基準のみで解説がないので、以下に簡単な説明を付記し、紹介しておく。

【解離性健忘 (Dissociative Amnesia)】

：いわゆる“記憶が飛ぶ”といった状態。ある出来事のことをすっかり忘れていて思い出さることができない。思い出せない事柄が、個人の重要な情報であり、通常の物忘れでは説明できないような状態。

【解離性とん走 (Dissociative Fugue)】

：小説やドラマでいわゆる“記憶喪失”として描かれるような症状。突然、家庭や仕事場から離れて放浪し、その過去を想起できなくなり、自分のアイデンティティについても混乱しているような状態。

【解離性同一性障害 (Dissociative Identity Disorder)】

：いわゆる“多重人格”である。一つの肉体をあたかも複数の人格が支配しているかのように振舞う状態。

【離人症性障害 (Depersonalization Disorder)】

：自分の精神や肉体から、自分が遊離してしまったかのように感じる状態。“臨死体験”なども、この障害に含まれる。

【特定不能の解離性障害 (Dissociative Disorder Not Otherwise Specified)】

：以上の4つに当てはまらないような解離性の障害。洗脳や、宗教的なトランス状態、憑依現象なども、この障害に含まれる。

2-3. 自我意識

さて、多重人格・シャーマニズム・宗教的神秘体験などの異常な意識状態について考える前に、そもそも意識とは何なのかを考えてみたいと思う。精神医学では自己に関する意識を“自我意識”と呼び、精神病理学者のカール・ヤスパーは、『精神病理学原論』⁵⁾ (P.77) において、以下のような四つの指標を与えている。

【単一性自我意識】

：自分という存在は常に一人であるという意識。この意識が障害されると、自分が複数存在し

たり、自分が分裂したりしているように意識される。

高橋紳吾は、この意識が傷害された場合、「自己像幻視の見られることがある。古くから死の予兆であるとか影法師として文学の主題にもなってきた。たとえば『詩と真実』のなかでゲーテがむこうから歩いてくる自分を見た」と記載しているが、それは失恋によって心身が極度に疲労した状態であった」（『きつねつきの科学』⁶⁾ P.135, 136 より引用）という例を挙げている（自己像幻視とは、自分の身体を外界に第二の身体として認める現象である）。また、自分と同じ姿をした者であるドッペルゲンガーに会ってしまうと、しばらくして死んでしまうという伝説は有名であるし、死の予兆という意味では、臨死体験における“幽体離脱”などもその有名な例であるといえる。また、単一性自我意識の変容は、精神障害だけでなく、一般にも身体や精神が極度に疲労したときに起こる。例えば、自分の生活を少し離れた所からドラマでも見ているかのように感じる感覚などである。多重人格が女性に多いのに対して、この二重身（自我分裂）は男性に多いとされている。

：単一性自我意識の障害の例としては以下のようなものもある。

- ・話をしていると、どンドン話が自動的に進んでいる感じがして、自分が話をしていっているのだが、同時に自分自身を外側から観察しているような、自分が自分でないような気がして、まるで自分が話をしていっているのを他で聞いているような感じがする。

【同一性自我意識】

：自分は過去から現在まで同一の自分であるという意識。この意識が障害されると、二つ以上の全く異なった人格が時間経過的に交代して現われる、いわゆる多重人格になる。この場合、その都度の交代人格の単一性自我意識（自分という存在は、常に一人であるという意識）は障害されていないため、本人には自覚症状がない。

：同一性自我意識の障害の例としては以下のようなものがある。

- ・自我と自我の溝が深まる。健常者の場合は、姿（服装）や性格（考え方）の変化があつたとしても記憶の連続によって自分の同一性を保つことができるが、それができなくなる。
- ・“自己の人格が変化した”という青年期特有の感覚。精神的な成長により、昔できていたことができなくなったりすることなど。

【能動性自我意識】

- ：行為しているのは自分である，という実行意識。及び，自分はここに存在している，という実在意識。前者（実行意識）の障害では作為体験，別名“させられ体験”が起きる。何者かに自分が操られているような状態となるもので，患者は“手が勝手に動いて字を書かせられる”などを感じる。後者（実在意識）の障害では自分の存在が希薄に感じられる離人症のような体験が起きる。
- ：能動性自我意識の障害の例としては以下のものがある。
 - ・自分自身の存在が疎になったと感じ，まるでただの機械であるかのように感じる。
 - ・宙ぶらりんで漂っていて，まるでその場に存在していないかのような気分。
 - ・誰かに何かを，そうさせられているという気分。

【外界と他人とに対立するものとしての自我意識（限界意識）】

- ：自分と自分以外の存在とは違う存在であるという意識。この意識が障害されると，思考伝播・思考奪取などの症状が起きる。また“自分はここにいるが，実は昨年死んだ弟である”とか，“自分は人間だけど鳥だ”という具合に，異なった二つの世界に同時に住んでいるとしても矛盾を感じない状態になる。極端になると，誰かが壁を叩くと，自分が叩かれたと感じてしまうという体験も起きる。
- ：限界意識の障害の例としては以下のものがある。
 - ・自分が自分でありながら，神になったように感じる（神との合一）。
 - ・自我と自我の溝が無くなる。
 - ・自分と外界との境界が曖昧になる。
 - ・他人に見透かされているような気分。

上記の4つの自我意識は，いずれも日頃は気付くことの無い意識である。つまり，通常は解離されていて，何か問題が起きない限りは意識されないのである（これは解離の機能の一つである。ある種の行動・機能の自動化であると思われる）。しかし，どの自我意識が障害されても重大な問題が起きてくるようである。

（4）異常をきたしている意識

では，多重人格・シャーマン・病的な憑依・宗教的神秘体験において，それぞれ上記のどの自我意識に変化が起きているかについて，自分なりに考えをまとめると以下のとおりになる。

【多重人格（解離性同一性障害）】

- ：主に同一性自我意識に障害がある。これにより，複数の交代人格が交代で現われるような症状が起きる。ただし，その都度の交代人格には，単一性自我意識の障害はない。なぜなら，それぞれの交代人格に変換し

た場合，交代人格 A なら A の，交代人格 B なら B のそれぞれの記憶が連続しており，他の交代人格が活動している間は，活動しないため自分が複数であるとか，分裂しているとは感じないからである。しかし，同時に単一性自我意識も傷害されている場合がある。この場合，他の交代人格が活動している間も意識があり，従って自分自身の身体を他人（他の交代人格）が使用しているのを見るという体験が起る。このような例は同時性多重人格と呼ばれ，稀なものである。

また，他の交代人格に操られていると感じる，能動性自我意識の障害も起るようである。このような例も稀だが，例えば，モートン・プリンスの『失われた＜私＞を求めて 症例ミス・ピーチャムの多重人格』⁷⁾にその例が見られる。

【シャーマン】

- ：シャーマニズム現象としては，憑依・体外離脱体験（異界への旅行）などが挙げられる。憑依に関しては，同一性自我意識と能動性自我意識の実行意識に変化が起る。多重人格と同様に憑依中（人格交代中）の記憶は，失う場合と失わない場合とがある。また，精霊などと一体化する場合は，限界意識とも関係があるのではないかと考えられる（例えば，鳥の精霊と一体化しているシャーマンは，自分は“自分でありながら鳥だ”というように述べるようである）。

体外離脱体験（シャーマンの魂が肉体を抜け出し，天界に飛翔したり，冥界に下降したりする体験）に関しては，単一性自我意識に変化が起っていると考えられる。なぜなら，他界に飛翔する際に，幽体離脱などの体験と同様に自分の姿を見ることもあるらしいからである。

どちらの場合にしても，シャーマンの場合，自我意識の異常を自らの意志で導き出し，コントロールできる点が，他の例とは異なる。このためにシャーマンは病的と見なされないのである。

【病的な憑依】

- ：同一性自我意識と能動性自我意識の実行意識に障害がある。

同一性自我意識については，人格変換を境にして本来の自己は消滅し憑依したものに置き換わってしまうという状態である。この状態は，多重人格における人格変換と同様である。ただ，異なる点は交代人格の肉体に対する感覚として，肉体が自分のものであるか，他人のものであるかという解釈の違いである。多重人格の場合，肉体は自分のものであり，その肉体の持ち主は自分である。しかし，憑依の場合，憑依している存在は外部から侵入して

は他人のものであり、その肉体の持ち主は自分ではないのである。

能動性自我意識の実行意識については、憑依した存在に主導権を握られ、操られてしまうという、いわゆる“させられ体験”が起こる。

[宗教的神秘体験]

：能動性自我意識の実行意識と限界意識に変容があると考えられる。

能動性自我意識の実行意識については、自分の意志と無関係に喋る“舌語り(異言)”や、手が勝手に動いて文字を書く“自動書記”などの体験の例がある。

限界意識については、自分の意識が広がっていき世界や神と一体化したかのような体験を経験するようである。この場合、その後、自分の存在が完全に消えたように感じる場合もあるため、一概に限界意識の障害であるとは言いきれないかもしれない。

次に、それぞれの異常をきたしている意識をまとめてみると次のようになる。

[多重人格]

同一性自我意識：継時性多重人格の場合。この症状が大多数である。

単一性自我意識：同時性多重人格の場合。この症状は稀である。

能動性自我意識：したくないことを“させられている”と感じる体験。この症状は稀である。

[シャーマン]

同一性自我意識：憑依体験。自分の意志でこの状態に入ることを除けば、“病的な憑依”も同様。

能動性自我意識：憑依体験。自分の意志でこの状態に入ることを除けば、“病的な憑依”も同様。

単一性自我意識：脱魂体験。

[宗教的神秘体験]

単一性自我意識：臨死体験における幽体離脱。

能動性自我意識：舌語り・自動書記などの体験。

限界意識：神や世界そのものとの合一の体験。

このようにまとめてみると、それぞれにおいて異常をきたしている意識に共通の重なっている部分があることが分かる。例えば、多重人格における交代人格の人格変換と、シャーマンにおける憑依の人格変換の見た目はほとんど同じであり、異なる部分は人格本人の肉体に関する解釈の違いである。また、シャーマンが憑依状態で行なう予言の類は、宗教的神秘体験における舌語り・自動書記と共通のものであるといえる。異なる点といえば、自分の意志でそれを行なえるかどうかという点である。つまり、これらの現象は、社会の文化や慣習、個人の技術や才能などにより、その現象の細部は異なるが基本的に

は共通した要素の強い、同様のメカニズムをもった現象であると考えることができる。従って、本論文において、これらの現象を一つ概念をもって考察するという考え方が妥当であるといえることができるだろう。

3. 多重人格

(1) その診断基準・定義

解離性同一性障害、一般に多重人格と呼ばれるこの障害は、あたかも一つの身体の中に複数の人格が存在し、その身体を交代で使用しているかのように振舞う障害である。和田秀樹によれば(『多重人格』⁸⁾ P.33, 39), この障害は、『DSM - III精神疾患の分類と診断の手引』では「多重人格性障害(Multiple Personality Disorder)」として、その後の『DSM - IV』では「解離性同一性障害(Dissociative Identity Disorder)」として記載されている。『DSM - IV』における診断基準を引用すると以下の通りである。

- A. 2つまたはそれ以上の、はっきりと他と区別される同一性または人格状態の存在(その各々は、環境および自己について知覚し、かかわり、思考する比較的持続する様式を持っている)
- B. これらの同一性または人格状態の少なくとも2つが、反復的に、患者の行動を統制する
- C. 重要な個人的情報の想起が不能であり、ふつうの物忘れて説明できないほど強い
- D. この障害は、物質(例：アルコール中毒時のブラックアウトまたは混乱した行動)または他の一般身体疾患(例：複雑部分発作)の直接的な生理学的作用によるものではない

[注] 子供の場合、その症状が、想像上の遊び仲間または他の空想的遊びに由来するものではない(『DSM - IV精神疾患の分類と診断の手引』⁴⁾ P.186より引用)

多重人格を構成する要素の中で中核となるものに交代人格がある。交代人格とは、フランク・W・パトナムによれば(『多重人格性障害』³⁾ P.145より引用)、「優位にある何らかの感情と自己感覚(身体イメージを含む)とを中心として組織された、意識の高度な分離状態である。これに付随して、ある範囲の行動レパートリーと、その状態に結合した記憶の一群(ワンセット)とをもっている」

と定義付けされている。多重人格患者の大多数に、この定義を満たす交代人格が複数存在している。

上記の定義における何らかの感情とは、例えば、抑鬱的な性格であるとか、楽天的な性格であるとかということであり、何らかの自己感覚とは、例えば、自分は女(身体本来の性別は男)であるとか、自分は子供であるとかということである。ある範囲の行動レパートリーとは、その交代人格の性格や技能によって、物事に対する反応の仕方が違うということである。また、その状態に結合した記憶とは、その交代人格の状態のときに体験したことに関する記憶で、交代人格毎に交代人格自身が体験した事柄の記

憶は連続して保持されているということである。

また、交代人格だけでなく、交代人格と比較して、人格というのにふさわしい幅と興行きが欠けていて、感情・行動・生活史の幅が狭く、単一の情動・機能の役割だけを担う人格断片と呼ばれる存在も多く存在している。典型的な人格断片としては、例えば、怒りや悲しみなどという単一の情動だけを示すものとか、自動車の運転や洗濯などのような単一の技能や役割だけをこなすようなものがある。

それぞれ他の交代人格が活動している間の記憶はなく、また、次項(2)でも述べる原因となる心的外傷体験についての記憶も基本的には持ち合わせていない。この記憶の断絶、封じ込めが解離の能力による大きな結果であると思われる。

(2) 発生原因

ではこのような障害は、一体どのようにして発生するのだろうか。一般的に多重人格は、幼児期・小児期に受けた心的外傷体験が主な発生原因であるとされている。フランク・W・パトナムは「臨床的に有効でもっとも説得力のある仮説は、小児期に繰り返しの心的外傷をこうむると普通誰しもがもっている解離能力が強化され、そうすると今度はそれが土台となっていつの日か交代人格が創り出され、彫琢されていくようになる」(『多重人格性障害』³⁾ P.68 より引用)と述べている。また、パトナムによれば(『多重人格性障害』³⁾ P.69~P.75)、米国立衛生研究所の一部門であるNIMH(National Institute of Mental Health:米国立精神衛生研究所)が行なった100例の調査によると、全多重人格患者の97%が小児期に重大な心的外傷体験があったと述べている。心的外傷体験の内容は、報告の多いものから順に、性的虐待・身体的虐待・性的+身体的虐待・極度のネグレクト(無視)・残酷な殺人の目撃・他の虐待・貧困である。そして、性的虐待の中で最も多いのが近親姦である。また、多重人格患者が加えられていた虐待は、多重人格ではない被虐待者が加えられていた虐待よりも“はるかにグロテスクでサディスティック”な傾向があるようである。また、虐待以外の心的外傷体験としては、親族や親友などの無残な死を目撃したという例も非常に多く、その中には、片方の親がもう一方の親を殺害した現場に居合わせたという場合も少なくない。また、兄弟などの被虐待同胞が親の手にかかって死亡するのを目撃したという場合もある。また、幼児期・小児期に被った心的外傷の種類の数と多重人格患者の交代人格の数には、関係が見られるように思われ、このことは子供が状況に応じて異なる解離状態に入ること、異なる防衛を行なうことを示唆している。

上記のパトナムの仮説によれば、誰もが持っている解離能力が強化され、それを土台として交代人格が創り出されるということだが、それでは誰もが多重人格になる可能性を秘めているのだろうか。次は、その発生基盤について見ていきたい。パトナムによ

れば(『多重人格性障害』³⁾ P.75~P.77)、多重人格の標準的な発生基盤は、「幼児の行動意識状態の順次の移行」「子供には、ある特殊な意識状態である解離状態に入り込む傾向性がある」「子供の空想能力一般」のように大きく分けて3つある。この3つについて、自分なりにまとめると以下のとおりになる。

[幼児期に見られる行動意識状態の順次の移行]

:パトナムによれば、誕生した頃の人間の行動の構成は、いくつかの別個の状態が直列的に繋がっているようなものである。その例を考えてみると、何か気に入らないことがあって大泣きしている赤ちゃんが、何か興味を惹くものを見つけてそれに夢中になり、ついさっきまでの泣いていた状態とは完全に別個の意識状態に移行するという例が思いつく。この行動時の各意識状態間の移行が示す状況は、多重人格における交代人格の変換の際に観察されるものと良く似ている。しかし、子供の成長につれて各行動意識状態間の移行は円滑になり、1歳を過ぎると異なる行動意識状態を区別することはとても難しくなる。人間が成長過程で直面する多くの発達課題の中には、異なる行動意識状態を一貫するアイデンティティを確立することと、異なる行動意識状態間の移行を調律することが含まれているが、心的外傷体験はこの成長を挫折させるのである。心的外傷体験が生み出す状況の中では、子供が行動意識状態間の分離性を高める方が一貫した自己を維持するよりもはるかに適応的なのである。なぜなら、異なる行動意識状態の意識を分離することで、心的外傷により生じた圧倒的な感情と記憶とを普段の意識状態とは別の意識状態の区画に封じ込めることができるようになるからである。

[子供の解離状態に入り込む傾向性]

:パトナムによれば、子供は大人よりもずっと高い催眠感受性を持っており、催眠感受性は9~10歳頃ピークとなる。そして、青年期に下降して成人のレベルで定常となる。また、催眠感受性がストレスへの対処に解離を用いる傾向性と関係している。これらのことから考えると、催眠感受性が高い幼・小児期には圧倒的な心的外傷体験に対する防衛として、自己催眠とでも言うべき解離を頻繁に起こすだろうし、容易に起こす能力を持っているのではないだろうか。

[子供の持つ空想能力一般]

:その空想能力の中でも特に“人格”を対象や状況に投影する能力である。例えば、子供がヌイグルミや人形に名前を付け、そのヌイグルミや人形にあたかも人格があるかのように振舞うことである。パトナムによれば、この能力が人の形をとったものが“想像の友人”である。“想像の友人”を作る目的としては、

“恐怖への対処・補助的超自我の役割・移行対象（母親の代替物）の一つの形として働く”などが挙げられる。例えば、誰も遊んでくれなくて寂しいときなどに遊び相手として“想像の友人”を作り出すというわけである。“想像の友人”が交代人格へと変化するのは、子供が“自己批判の発達・自己尊敬と愛との維持・欲求と衝動の区別・理性と判断力との発達・行動をしようとする際に親の態度を借りること”などという不可欠で重要な発達課題を心的外傷体験に満ちた環境のために達成できなかつたときである。

以上のような発生基盤があるために、誰もが多重人格になる可能性を秘めているのである。しかし、心的外傷体験を被った場合、誰もが多重人格になってしまうわけではない。実際には多重人格になるケースは稀である。例えば、同じような心的外傷体験を被っても、その後のケアや、それまでに育ってきた環境の違いなどによって、多重人格にはならないし、PTSD (post-traumatic stress disorder: 心的外傷後ストレス障害) といった他の精神病理に陥ることもないのである。つまり、ある体験に対する防衛の方法は、それまでの環境に深く関係しているし、体験直後の周囲の行動とも深く関係しているということなのである。

(3) 交代人格のパターンや類型

それぞれの症例で別個に様々な症状を示す多重人格だが、多重人格を構成する要素の中で中核となる交代人格にはいくつかの類型やパターンが存在する。以下にその類型・パターンを示す。以下の類型は、[被虐待人格]を除いては、フランク・W・パトナムの『多重人格性障害』³⁾ P.149~P.158 を参考にまとめたものである。

[オリジナル人格]

: 出生直後に生まれたもともとの人格であり、重大なストレスから身体の生存を助けるために、自分自身から最初に交代人格を切り離れた存在である。大抵は非活動的で、ごく幼少時のある時点から“眠らされている”などの無能力状態におかれていることが多い。そのため、オリジナル人格が主人格となって活動していることはほとんどない。オリジナル人格は、治療の終盤期に心的外傷の大部分が治療によって解消されてから現われるのが普通である。

後述するウィリアム・スタンリー・ミリガン（ビリー・ミリガン）（『24人のビリー・ミリガン』⁹⁾）の例では、ビリーは幼・小児期に受けた心的外傷から身を守るために多様な交代人格を作り出し、その後、16歳の時点から他の交代人格たちにより、無能力状態に置かれて保護されることとなり、表に現われることはなくなった。

[主人格]

: 任意の時期において最大時間身体を支配している人格である。典型的な主人格は、抑鬱的で不安が強く、無快楽的・硬直的・冷感症的で、強迫的に善良で良心に縛られ、マゾヒスト的で、多彩な身体症状とくに頭痛に悩まされている場合が多い。

通常、最初に医師のもとに治療を求めにやってくるのが、この人格である。

NIMH の調査では、患者の3分の2において、他の交代人格の存在を知らない。この場合、他の交代人格たちが自分自身の存在を隠している場合よりも、主人格の方が他の交代人格が存在する証拠を否定する場合の方が多い。主人格は単一の人格であるとは限らず、複数の交代人格たちが合意し、共同の努力によって作り上げた社会的外面、主人格群とも呼ぶべき存在である場合もある。この場合、ある交代人格が体験したことは、ノートにメモされるなどして他の交代人格に伝えられるか、他の交代人格が活動している場合でも活動できる交代人格が、脱落している部分の記憶を補完するのである。

[記録人格]

: 患者の生活史について嫌な記憶も含めて概ね完全な記憶を保持している人格。治療に対しては、心的外傷体験の記憶が他の交代人格に知られることを避けるなどの理由で、消極的になりがちである。

[子供人格]

: ある年齢に封じられていて、精神的に成長することがない人格であり、しばしば大人人格よりも数が多い。早期の心的外傷体験の記憶や感情を保持する役割を担っている場合が多く、そのために脅えていることが多い。また、上記とは別に虐待の恐怖を受けた人格との釣り合いを取るために存在する子供人格もいる。こちら側の人格は、愛情を求めてやまず、他方の人格が失った天真爛漫な無邪気さを持ち続けている。虐待者を理想化してしまうほどに底抜けに能天気な楽道家の場合もある。

[自閉的人格]

: 主に幼・小児人格であり、他の交代人格たちが身体を使う気がないときに“表に出される”ことが多い人格であり、自閉的な子供のように振舞うことが多い。閉じ込められたり、押さえつけられたり、強い調子で取り調べられたりするような状況（つまり、他の交代人格たちが表に出たくないときである）で特に出現し易いようである。

[被虐待人格]

: 虐待や取調べなどの嫌な体験を一身に受け持つ人格。上記の自閉的人格と同様に他の交代

人格たちが表に出たくないときに、表に出される。中には無痛覚であったり、眼や耳が不自由であったりして、他の交代人格では耐えがたいような体験を比較的楽に耐えられる場合もある。

【迫害者人格】

：多重人格患者の少なくとも半数以上が所持していると言われる人格。この人格は、自分自身を主人格と真向から対立する存在であると考えており、主人格や他の交代人格たちを傷つけたり殺害したりしようとしている。迫害者人格は、自分と他の交代人格を完全に別個の存在であると認識しているため、他の交代人格を殺しても自分は生きていられると考えていることが多い。後述する同一化について考えると、迫害者人格の大部分は、かつての虐待者に同一化したものであると予想できる。また、かつて他の交代人格たちの代わりに虐待を引き受けていた交代人格（被虐待者人格）が、以前自分自身が受けた虐待を他の交代人格にも体験させようとして迫害者人格に転じている場合もある。
迫害者人格は“怒り”という形で、患者が生き延び回復していくために必要な精神的エネルギーを保持している。

【自殺者人格】

：自分自身を生きてはいけぬ存在であると考え、ひたすらに自殺することだけに心を奪われている人格。これは抑圧されている心的外傷体験の記憶が作用して、自分自身を薄汚れていて、生きてはいけぬ存在であると感じさせていると思われる。自殺者人格は、他の交代人格の存在さえ知らないことがある。

【性的放縦人格】

：大抵の患者に存在する人格で、禁じられた衝動、主に性衝動を示す。

【薬物乱用者人格】

：鎮静剤・睡眠剤・麻酔剤が最も一般的に使用される薬物であり、刺激剤・アルコールがそれに続く。通常、薬物乱用はある交代人格だけに限定されており、多数存在することは少ない。

【保護者人格】

：患者を保護・救済しようとする人格。外部からの危険に対抗したり、内部の抑制・均衡システムの一部を担い自己破壊的な交代人格（迫害者人格や自殺者人格など）の自己破壊衝動に対抗したりしている。

【内部の自己救済者（Internal Self Helper）】

：身体的には活気が無く感情にも乏しいが、人格システム内部における活動の情報や深い洞察力を持っている。

【異性人格】

：肉体本来の性別とは逆の性別の人格。女性患者における男性人格は、予想外に屈強な力を持っており、身体防衛・機械操作などの役割を受け持つことが多い。男性患者における女性人格は、年長の“良いお母さん”的な存在であり、助言を与えたり自己破壊的な衝動を和らげたりする役割を受け持つことが多い。

【管理者・強迫的人格】

：しばしば職場に出現し、患者が生活費を稼ぐ手助けをする人格。職業的に有能なこともあり、断片化する個人全体をまとめる内的役割を果たしている場合も多い。性格は、冷酷で感情に流されず、権威的である。これは他の交代人格の存在を世間に明らかにしそうな、他人との馴染みの関係に冷水をかけて潰すためである（自分たちが多重人格であると分かれば、普通に生活していくのが困難になると考えているため）。

【身体障害のある人格】

：その名の通り、身体に障害を持っている人格。目が見えなかったり、耳が聞こえなかったりする。ただし、この人格が有する身体障害（聴力・視力障害、肢体機能喪失など）は、心理的なものであり、器質的な原因のある生理学的障害ではない。この心理的な身体障害は、ヒステリーにおける身体障害に通じる所があると考えられる。

【無感覚・無痛覚的人格】

：痛みの感覚を否認する、痛みを感じない人格。この交代人格の起源は、しばしば苦痛な身体的あるいは性的虐待に遡る。つまり、身体的・性的な虐待に耐えるために身体の痛みを感じないようにしてしまったのである。この交代人格が自傷行為に一役買っている場合もある。

この人格も上記の“身体障害のある人格”同様にヒステリーと大きな関係があると考えられる。なぜなら、ヒステリーを構成する症状の一つにも、無感覚や無痛覚が存在するからである。

【特殊な才能・技能を持つ人格】

：ある特定の技能・知識に特化され、並外れて熟練している人格。特化された役割を果たすためだけに存在している場合もあり、その場合は人格断片であることが多い。

【模倣者人格】

：他の交代人格の声や仕草などを模倣する機能を保有する人格。その交代人格では対処困難な事態に出現し、代わりに対応する場合もある。

【悪魔・聖霊】

：田舎出身の患者や原理主義的宗教信者に見られ、自分のことを悪魔や聖霊であるとする人格。

悪魔は悪意を持った迫害者タイプ、聖霊は内部の自己救済者タイプの人格である。
 この交代人格は、交代人格自身が肉体の外側から侵入してきたという観念を持っている点など、シャーマニズムなどにおける憑依と同様のものであると考えることができる。

上記のような交代人格の類型は、1つの人格が1つの特性だけを有していることもあれば、1つの人格が同時に複数の特性を有している場合もある(例えば、無痛覚であり、迫害者的である異性人格など)。

(4) 交代人格の名前に関する問題

交代人格について共通する要素として、交代人格たちは“名前”を持つとすることが多いということがある。名前は本人の名前から派生している場合(例えば、ジョエル・O・ブレンディの研究(『多重人格障害』¹⁰⁾ P.157~P.166)における多重人格者の交代人格の名前はそれぞれ、ジェイ、ジェイムズ、シェイ、と語幹の類似したものだった)もあれば、ある種の情動や技術などその交代人格が担っている役割に関連して付けられている場合(ダニエル・キイスの『24人のビリー・ミリガン』⁹⁾の場合、怒りを司り憎悪の管理者と呼ばれている交代人格の名前はレイゲンと言う。これは激怒を意味する英語“rage”から派生しているのではないかと考えられる)もある。また、自分の名前を明らかにしようとしない交代人格も存在する。

(5) 人格変換に伴う様々な変化

多重人格において人格変換は、さまざまな状況やストレスに反応して起こる。人格変換に伴い身体的な変化や、心理的な変化も起こる。身体的な変化としては、人相・表情・姿勢・口調などの変化、利腕の変化、アルコールなどの薬物への反応も変化する。心理的な変化としては、感情・行動年齢・思考過程・趣味嗜好などの変化が見られる。具体的な例を挙げると、身体的な変化では、普段は煙草など吸わないような人間がヘビースモーカーに変わったり、心理的な変化では、普段はとても温厚な人間の気性がとても激しくなったりといった具合である。

また、コーベット・H・セグペン、ハーヴィ・M・クレックレーらのイヴの症例では、人格変換に伴って、図1に示すようにそれぞれの人格における筆跡も変わっていた。

また、フィリップ・M・クーンズらの研究(『多重人格障害』¹⁰⁾ P.147~P.156)によれば、人格変換と共に脳波も変化することが分かっている。この研究は、二人の多重人格者と、一人の対照群被験者(正常人が多重人格者の各交代人格の態度や感情を演技する)の脳波を視察し、周波数分析にかけ比較するというものだった。結果としては、脳波と視覚誘発電位については、二人の多重人格患者の各人格間に差はほとんど見られず、眼球活動や筋活動の差は、さ

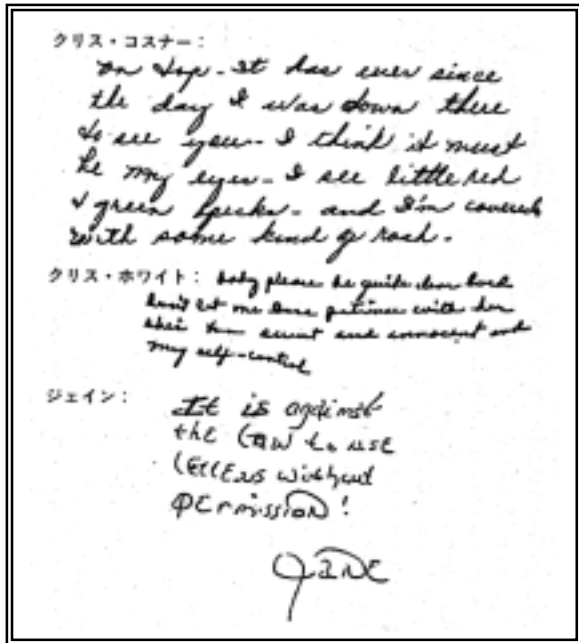


図1. クリス・C・サイズモアの人格による筆跡の違い
 (『私はイヴ ある多重人格者の自伝』¹¹⁾ P.364より引用)

まざまな人格間で認められた。また、周波数分析では、対照群の複数の“演技された人格”間に有意差が最も多く見られた。この研究結果から考えると、多重人格における各交代人格の脳波の違いは、全くの別人の脳波というよりも、同一人物の感情や情動の変化による脳波の違いに近いと思われ、人格変換のメカニズムと感情・情動変化のメカニズムの間には深い関係があるのでは無いかと考えることができる。

表1. ウィリアム・スタンリー・ミリガンに関するまとめ

: 以下の表は、ダニエル・キイスの『24人のビリー・ミリガン』のウィリアム・スタンリー・ミリガン（ビリー・ミリガン）についてまとめたものである。

年齢はビリーの年齢（肉体年齢）が26歳のときに、各人格が示した自分の年齢である。人格類型に関しては、“3. (3) 交代人格のパターンや類型”を参照。

名前（年齢）	人格類型	特技・技能・言語	性格など
教師(26)	オリジナル・記録	他の人格に教えた全ての技能	聡明・感受性が強い 素晴らしいユーモア
ビリー(26)	オリジナル・自殺者		怯えている 自己評価が低い
アーサー(22)	保護者・管理者 内部の自己救済者 強迫的 特殊な才能・技能	英語（イギリスのアクセント） アラビア語（読み書き） 生物学・物理学・化学	感情の起伏なし
レイゲン(23)	保護者 薬物乱用者 特殊な才能・技能	英語（スラヴ訛り） セルビア語（読み書き） クロアチア語（読み書き） 銃と弾薬の権威・空手の達人 アドレナリンのコントロール	憎悪の管理者
アレン(18)	特殊な才能・技能 模倣者	交渉術・ドラム・肖像画	不可知論者 喫煙者
トミー(16)	特殊な才能・技能	電気の専門家・縄抜け サクソファン・風景画	喧嘩腰 反社会的
ダニー(14)	子供	静物画	怯えている
デイヴィッド(8)	子供		苦痛の管理者 混乱
クリステン(3)	子供・異性	花や蝶の絵・色塗りが好き レイゲンを抑える役目	女性・利発 失読症
クリストファー(13)	子供	英語（コックニー訛り） ハモニカ	従順・不安
アダラナ(19)	異性	料理・家事	女性・内気・孤独 内向的・レズビアン
フィリップ(20)	性的放縦	英語（ブルックリン訛り）	乱暴者
ケヴィン(20)	性的放縦		素人臭い犯罪者
ウォルター(22)	特殊な才能・技能	方向感覚抜群	エキセントリック
エイプリル(19)	異性・性的放縦	英語（ボストン訛り） 裁縫	女性・あばずれ 凶暴な復讐心 （対ビリーの父親）
サミュエル(18)	特殊な才能・技能	彫刻（木彫）	正統派ユダヤ教徒
マーク(16)		単調な労働	自主性無し
スティーブ(21)			極端に自己中心的
リー(20)	特殊な才能・技能	コメディアン・道化師	悪ふざけを好む 結果に無関心
ジェイソン(13)	特殊な才能・技能	安全弁（ガス抜き効果）	癲癇を起こす
ロバート(17)			夢想家 野心や知的関心無し
ショーン(4)	子供・身体障害		耳が不自由
マーティン(19)			物欲・見栄っ張り 自慢屋・気取り屋
ティモシー(15)	異性・自閉的		女性・怯え

人格変換に伴う身体的・心理的変化や、前述した交代人格の類型の具体的な例として、ダニエル・キイスの『24人のビリー・ミリガン』で有名なウィリアム・スタンリー・ミリガン（ビリー・ミリガン）の各交代人格の類型、保有している特技・技

能・言語、性格などについて、表1にまとめたので参照して欲しい。

ビリー・ミリガンの例では、オリジナル人格であるビリーは、16歳の頃から眠らされている無能力状態に置かれ、他の交代人格たちによって保護され

主人格というものは存在せず、アーサーやレイゲンを中心として、さまざまな状況に合わせて各交代人格を使い分ける主人格群という形態をとっている。また、迫害者人格というものがないが、その理由は、幼少時から内部の自己救済者というべき交代人格であるアーサーが育ったために、各交代人格たちが協力することができ、それによりオリジナル人格であるビリー（もしくはその肉体）を守るための人格システムが構築されたからだと考えることができる。

〔6〕多重人格における精神医学的な症状

次にフランク・W・パトナムの『多重人格性障害』³⁾ (P.85~P.93)を参考とし、多重人格における精神医学的な症状について簡潔にまとめると以下のとおりである。

〔抑鬱症状〕

：多重人格患者（特に主人格）が最もよく呈する単一症状。自殺・自己破壊念慮などが存在し、自分自身に対する自己評価が低く、全ての事柄に打ちのめされたような感じで、なおかつ無快楽的である。また、注意集中困難・疲労・性的困難・号泣発作があることもある。大鬱病における抑鬱症状と多重人格性障害における抑鬱症状では“多重人格性障害においては抑鬱症状が長続きすることは稀である”というような、区別するのに役立つ徴候を発見できることが多い。

また、睡眠に関する障害においては、不安障害や鬱病に見られる入眠困難・早朝覚醒と違い、反復性の悪夢や、恐ろしい入出眠時現象といった心的外傷後ストレス障害によく見られるような睡眠障害が起こることが特徴的である。

〔解離症状〕

：多重人格患者は、多種多様な解離症状を呈している。その中でも健忘や時間脱落などの症状が多い。患者は直接にはこれらの解離症状を訴えないのが普通である。その理由はいくつか挙げられる。まず、解離症状自体を解離していて、患者自身にとってその体験が事実であるかどうかあやふやであるから、症状を訴えることができない。次に、自分が狂っていると思われる、病院に入れられるという不安から症状を訴えることができない。また、患者が解離症状を普通の体験だと思っており、特に異常なことだと思わないために訴えないという場合もある。

〔不安・恐怖症状〕

：多重人格患者には、恐怖障害・不安障害・恐慌障害を思わせる症状がしばしば見られる。主人格の不安発作は、しばしば人格変換と連動している。主人格は多様な身体症状を人格変換に前駆して、または同時に体験すること

がある。

また、人格変換開始の“合図”となる状況が恐怖症様の行動を引き起こす場合もある。これは多重人格患者が人格変換やフラッシュバックの引き金となる状況を回避する方法として恐怖症的な挙動（恐怖症的回避）を示し、その状況から遠ざかろうとしているのである。

〔薬物乱用〕

：多重人格患者が主に乱用する薬物は（3）の薬物乱用者人格の項で述べたとおり、鎮静剤・睡眠剤で、刺激剤・アルコールの乱用も見られるが、幻覚剤を用いる者は多く無いようである。頭痛のために処方された鎮痛剤を乱用することから、薬物乱用が始まる場合が多い。

〔幻覚〕

：多重人格患者の大半は幻聴・幻視を体験している。多重人格における幻聴は明瞭に聞こえる。この徴候は、分裂病患者に見られる明瞭ではない幻聴との鑑別に有用である。幻視は、鏡に映る自分の顔が全く違う人に変わっていたり、自分が本来の肉体の性別とは逆の性別であるように見えたりする。また、自分自身を外側から眺めるような体外離脱体験を経験する患者もいる。

〔思考障害〕

：交代人格間の変換が急速なために、まとまった行動を一貫して行なう時間さえ保つことができない状態で、人格間の主導権争いや主導権破棄によって起こる。ただ、これらの症状は一過性であり、分裂病に見られるような真の持続性思考障害を見せることはない。

〔妄想〕

：交代人格の一部が“自分は独立し自律している”と思ひ込み、自分を傷つけずに他の交代人格の身体に打撃を与えることができるという強固な信念を持っている場合がある。この信念が強固で一切の反論を許さない場合、これは明らかに妄想である。また、多重人格患者が明らかに“させられ妄想”を呈する場合もある。ただ、この体験には現実的な根拠がある。（3）の主人格の項で述べたように主人格の3分の2は他の交代人格の存在を知らない。しかし、他の交代人格の存在を否認しながらも、自分ではしたくない行動をしているという理解し難い体験を通じて、受動的に他の交代人格の影響を受けているのである。“させられ妄想”は、分裂病や憑依に類似性が認められる。

〔自殺と自傷〕

：自殺行為は、多重人格患者には極めてありふれたものである。多重人格患者の少なくとも4分の3が、一回以上の真剣な自殺企図を行なったことを明らかにしている。

【緊張病症状】

：緊張病症状は身体が緊張し、こわばって動かなくなるような症状で、何人かの患者は、外傷体験の大量想起の引き金を引いた外的刺激に圧倒されたときに緊張病症状に入り込んでいくと語り、また、ある患者は緊張病症状を一種の癒し体験として用いていて、自分を圧倒する刺激をふるいに掛けて消すか、速度を遅くして許容できるレベルにしているとも語っている。

緊張病症状は、分裂病に類似性が認められる。

【性転換と衣装倒錯】

：多重人格患者のかなりの割合が、自分を実際の生物学的な性別とは反対の性別であると認知している異性人格を持っている。そういった異性人格は、自分の性別（肉体の性別とは逆の性別）に合った服を着るわけである。

このように多重人格には、他の精神病や、異常な心理状態になる現象と重なる精神的な症状が多数存在する。これらの症状がさまざまに組み合わさって発現する所が、多重人格が最も複雑な解離現象といわれる所以なのである。

（7）交代人格の記憶や、互いの認知

多重人格における交代人格たちは、基本的に自分自身が身体を使用している間の記憶に関しては、正常人と同様に正常な記憶を持っている。しかし、交代人格の中には他の交代人格が活動している間の記憶も保有している人格もいるという事実が、多重人格における記憶の問題をより複雑なものにしている。

記憶の問題は、同時に交代人格同士の認知の問題にも関わってくる。交代人格同士の認知の度合は、以下のように大きく3つに分けることができる。

（詳しくは、本論文 7. (5) 交代人格の互いの認知 参照）

- 1) 交代人格同士が互いに認知している場合。
- 2) 一方通行的に片方の交代人格だけが、もう一方の交代人格のことを認知している場合。
- 3) 交代人格同士が互いに認知していない場合。

この3つの認知の度合は、複数の交代人格間でさまざまに組み合わさっている。また、他の交代人格を認知している場合でも、認知している他の交代人格が活動している間の記憶を保有している場合と、していない場合があり、この点もその複雑さを増すのに一役買っている。

また、モートン・プリンスの『失われた私』⁷⁾におけるミス・ビーチャムの例を見ると、基本的には抑鬱的な人格は他の交代人格のことを認知しておらず、精神的なエネルギーに満ちている交代人格ほど、他の交代人格のことを認知している傾向があるように思われる。また、他のある交代人格

Aが活動している時の記憶も保有している交代人格Bは、交代人格Aよりも人格システム内の影響力が強い場合が多く、交代人格Aの行動について影響を与えられる場合もある。この場合、影響を与えられた交代人格Aは“させられ体験”を経験することになるのである。

また、高橋紳吾によると（『きつねつきの科学』⁶⁾ P.141）、多重人格や、後に述べる憑依現象などで、記憶を失った患者に、アモバルビタール（自白剤などと呼ばれ、人間を簡単に類催眠状態にする薬物）という薬物を静脈注射すると、容易にその記憶を蘇らせることができるようだ。このことから、“覚えていない”のではなく“思い出せない”、つまり、記憶の三つの要素である“記銘”“保持”“再生”の中で、“再生”の障害であることが分かる。

交代人格の記憶・認知に関する問題は、本論文 7. において、さらに詳しく考察していきたい。

（8）同一化の問題

人間が人格を形成する上での重要な概念として同一化がある。多重人格においても交代人格の形成に関して、同一化が重要な位置を占めているように思われる。同一化の対象は、虐待者（主に両親であることが多い）・家族・TVのヒーロー・漫画のキャラクター・動物・天使・悪魔など多種多様であるが、これらの対象への同一化と、技能・能力・知識・心的外傷体験の記憶などといった複数の断片的な異なる要素が組み合わさり、交代人格は形成されていると考えることができる。

例えば、虐待されたときのやり場のない怒りを核として、虐待者を取り込んだ場合、その人格は迫害者人格になると予想することができるし、逆に満たされることの無かった希望・喜び・愛情などを核として、TVのヒーローなどを取り込んだ場合、その人格は救済者人格や保護者人格になると予想できるのである。

4. シャーマン

（1）その定義

多重人格と良く似た症状に憑依現象がある。憑依現象においては、人格変換後の交代人格が霊的存在であり、その交代人格が身体外部から侵入してきて今現在その身体を自由を奪っていると考えている点で、多重人格と異なる点である。多重人格における交代人格は、基本的に身体は自分のものであると認識しているため、この肉体に対する解釈の違いが重要な違いであるといえる。ここでは憑依を含め、シャーマニズム、特にシャーマンについて考察していきたい。

シャーマンは世界各地の文化の中に、それぞれ名称は違うが多数存在している。ネルソンのシャーマン規定の要旨（『憑霊とシャーマン』¹²⁾ P.71）を基本とし、その全体を広く定義すれば、シャーマンとは、

引き出し、霊的存在に直接接触可能である存在、となる。

(ここでいう霊的存在とは“身体・物体に内在してこれを生かし、身体・物体を離れて他に憑入・付着でき、身体・物体が消滅しても恒久的に存在でき、通常の人間には普通見えず、優れて人格的で喜怒哀楽の心意を持つ存在”である。)

シャーマンにおける能力とは、脱魂や憑依などの異常心理状態に入る能力である。この現象が多重人格などと違い病的とされないのは以下の理由からである。

- ・シャーマンは自分の意志で、脱魂や憑依などの異常心理状態に入ることができる。
- ・上記に加え自分の意志で、その異常心理状態から元の状態に戻ることができる。
- ・能力を自分の意志で、制御・利用できるように社会的な生活の障害とならない。
- ・その能力を社会の個人・団体のために有益に利用することができる。

シャーマンの定義・規定には諸説あるが、まとめると次のように述べるができる。シャーマンとは、イニシエーション的な経験により一般の人間から聖別され、自分の意志で脱魂や憑依という異常心理状態に入り、その状態を制御・利用することにより、社会や個人に対して有益な役割を果たす職能者である。

上記と異なり、病的と呼ばれる憑依は、『DSM - IV』では、特定不能の解離性障害に含まれている。特定不能の解離性障害というのは、優勢な病像が解離性の症状であるが、特定の解離性障害(解離性健忘、解離性とん走、解離性同一性障害、離人症性障害)の基準を満たさない障害である。憑依はこのカテゴリーの4番目に含まれている。

「4. 解離性トランス状態

：特定の地域および文化に固有な単一の、または挿話性の意識状態、同一性または記憶の障害。解離性トランスは、直接接している環境に対する認識の狭窄化、常同的行動または動作で、自己の意志の及ぶ範囲を越えていると体験されるものに関するものである。憑依トランスは、個人としてのいつもの同一性感覚が新しい同一性に置き換わるもので、魂、力、神、または他の人の影響を受け常同的な“不随意”運動または健忘を伴うものに関するものである。その例として、アモク(インドネシア)、ピバイナン(インドネシア)、ラター(マレーシア)、ピプロクトック(北極)、アタク・ド・ナビオス(ラテン・アメリカ)および憑依(インド)などがある。解離性またはトランス障害は、広く受け入れられている集合的文化習慣または宗教行為の正常な一部分ではない。」

(『DSM - IV精神疾患の分類と診断の手引』⁴⁾ P. 187より引用)

シャーマンの憑依と病的な憑依の違いは、やはり、自分自身の意志でその状態に入るかどうかということが重要な観点になると考えられる。

(2) シャーマン化の方法

シャーマンは、超自然的な存在や領域と直接的に接触・交信できる人間である。このような普通の人間と異なる能力を獲得するためには、体験・訓練・修業の過程を経なければならない。それは一体どのようなものであろうか。佐々木宏幹によれば(『憑霊とシャーマン』¹²⁾ P. 202~P. 220)、シャーマン化の方法としては大きく分けて召命型、世襲継承型、個人・職業型の3つがあるとされているが、本論文では、召命型、世襲型、探求型と分類した方がより自然で分かり易いと思われるので、ここではその分類で以下に説明を示す。

【召命型】

：自分の意志で選んだわけではなく、超自然的な存在により強制的にシャーマンになることを選択させられた型。召命を受けることは、守護者または下僕として霊的存在を受け入れることである。召命を受ける者は、精神的・肉体的困難(病気や、家庭の不和など)に悩まされているか、思春期などの人生における年齢的な重大な時期にいる者である。このことは、病的な憑依の原因と類似している。召命において霊的存在は、夢やトランス状態の中で現われるが、その種類や現われ方には、“異性の霊的存在が求婚してくる、それを受け入れないと病気に罹る”などの一定の型が見られる。また、その後のシャーマンとしての思想や行動は、その地域の社会・文化に従っており、その地域社会に承認されたものである。

多重人格と同様に不安・苦悩・挫折など精神的・肉体的困難に見舞われた者全てが、憑依現象を呈したり、シャーマンとなったりするわけではない。そこには個人的な資質(性格など)や、周囲の環境(文化・宗教など)が深く関係していると考えられる。

【世襲型】

：世襲的継承型のシャーマンは、ネパールのシェルパ族のようにシャーマンの職能が家筋を巡り代々伝えられている場合(技術や儀礼の方法などが、家を継ぐ者に代々伝えられていくという形式)と、パキスタンのダヤールのようにシャーマンの資質が血縁的に継承されるという場合(〇〇家の血筋には霊と交渉する力があるという形式)の2通りがある。世襲型のシャーマンは、召命型・探求型のシャーマンと比較して霊的存在に対する接触の仕方が希薄である傾向がある。シャーマンは、世襲化されることでその存在を、呪術的な力を行使し霊的存在と直接接触する存在から、霊的存在に仕え祀る祭司(プリースト)的な存在へと変貌させるといった特徴を持っているようである。

【探求型】

：身体障害とか経済的・社会的・精神的な理由から、自分からシャーマンになることを目指す型である。探求型のシャーマンがシャーマンになる過程は、民俗・社会・文化を越えて類似している。即ち、師匠につき、トランス状態に入り、タブーを守り、呪文や儀礼を習得するという過程である。これらの修業は熾烈を極めるため、召命型においてその契機となる精神的・肉体的困難を人工的に作り出すことになり、その結果としてシャーマンとしての能力が身に付くと考えることができる。

佐々木宏幹によれば、このシャーマンになるための過程、イニシエーション過程について、高度宗教（仏教やヒンドゥ教のような高度な観念体系を有する宗教）の発達している地域では召命型に比べ探求型のシャーマンが、未開社会においては探求型に比べ召命型のシャーマンが多いようである。また、召命型にしても探求型にしても霊的存在と直接接触するような異常心理状態に入り込むシャーマンの発生原因は、肉体的・精神的困難と一致しており、これは、病的な憑依や多重人格の発生原因とも一致している。このことから、シャーマンの能力もその源泉を解離能力に持っていると考えられる。また、シャーマンの能力には、後述するように大きく憑依と脱魂の2つがあるが、高度宗教の発達している地域では憑依、未開社会では脱魂が良く見られるようである。

以上の見解をまとめると、高度宗教定着地域では探求型と憑依、未開社会では召命型と脱魂が優勢であるようである。しかし、自分からシャーマンになるようとする探求型と霊的存在に取り憑かれる憑依、霊的存在に強制的にシャーマン化させられる召命型と自分の魂を身体から離脱させ自分の意志で自由に世界を飛翔する脱魂、その一見相反するような組み合わせ同士がそれぞれ組みとなり、ある地域で優勢となっている所は、今までの研究者は触れていないが、奇妙な感じがする。通常なら、自分の意志でシャーマンとなった者は、シャーマンになっても自分の意志で活動し、霊的存在の強制でシャーマンとなった者は、シャーマンになっても霊的存在の強制力で活動するのが普通ではないだろうか。この事実の理由を推測すると、高度宗教定着地域では、高度な宗教的観念があるため、憑依する存在もしっかりとイメージできる（例えば、仏や天使など）。また、書物などの媒体もしっかりとしているため、個人的な探求がしやすいのではないだろうか。これに対して、未開社会では、書物ではなく口伝によってさまざまな事柄が伝えられていく、そのため、未知の存在への恐怖から召命型が多くなる。加えて、外界へ対する知識も乏しく、そのために森や海、山などへの畏怖の念が促進され、さまざまに想像された具体的な他界観念が生まれるために、他界飛翔を中心とする脱魂が優勢となるのではないだろうか。

（3）シャーマンのトランス状態に関する類型

シャーマンと呼ばれる存在は、世界各地に多数存在するが、シャーマンにもパターンや類型が存在する。また、そのパターン分けにも役割を果たすときの仕方に関する類型と、役割に関する類型が存在する。まずは役割を果たすときの仕方、つまり、トランス状態に関する類型から見ていきたい。トランス状態とは、シャーマンが能力を行使する際に入り込む意識の変容状態のことである。

【脱魂（エクスタシー）型】

：自分の魂・精神が肉体を抜け出し、遠くの土地へ飛翔したり、異界へ旅行したりする事により、予言・治病などの役割を果たす型。この型の中でもさらに、自力で脱魂する場合と、守護霊の援助を受ける場合の二通りが存在する。前者では、シャーマンの靈魂が自力で超自然的な領域（天界・冥界など）に飛翔し、そこで霊的存在と直接交流・接触を持つことにより役割を果たす。例えば、佐々木宏幹によれば、インドのアオ・ナガ族のシャーマンは、病人の治病のために天に住む彼（病人）の“運命”と呼ばれる存在のもとへ供物を捧げに行くのである。このときシャーマンは、自分の魂をトランス状態の中で、天にある“運命”の国に送り込むのである（『憑霊とシャーマン』¹² P.177~P.179）。後者では、シャーマンの靈魂は守護霊の援助によって超自然的な領域に赴くことにより役割を果たす。例えば、エスキモーのシャーマンは、守護霊が開いた海底世界への道を通り、海の霊セドナ神に供物を捧げるために旅行をするのである（同書 P.192, 193）。

一般的に脱魂・移動型のシャーマンでは、超自然的領域である他界に飛翔することで、天上の最高神に供物を届けたり、悪霊に誘拐された人間の靈魂を取り戻したり、死者の靈魂を冥土に送り届けたりする（成仏させる）など、現実の人間の生活と関連してプラスとなるような役割を果たすことが多いようである。また、後述する記憶の問題に関して言えば、トランス状態において自分自身の靈魂が他界を旅行するためにトランス中の記憶は基本的に保持しているようである。

佐々木宏幹によれば（『憑霊とシャーマン』¹² P.189）、ミルチア・エリアーデ（『著作集 第十三巻 一宗教と芸術—』¹³ 『シャーマニズム』¹⁴）は、脱魂がシャーマンの本質的な特徴であると述べているが、他界飛翔をするシャーマンの中にも、その前段階として、憑依現象を呈するものがあるし、世界的に見れば、憑依型シャーマンの数の方が多いということから、脱魂がシャーマンの本質的特徴であるとはいえないと考えられる。

【憑依（ポゼッション）型】

：シャーマン自身の霊魂が超自然的領域である他界に直接赴くことは無く、守護霊を自分自身に憑依させて卜占・予言・治病を行なうか、祖霊・死霊・特定の神霊などを憑依させて依頼者と霊的存在との媒介者としての霊媒の役割を果たす型。例えば、日本のユタやイタコは、守護霊を憑依させたり、依頼人の望む死者の霊や先祖の霊を憑依させたりして、依頼者に対して助言を与える。

私見では、多重人格や病的な憑依などとの類似点が最も多く見られるのがこの型である。多重人格で言えば、時間経過と共に人格が入れ替わり行動する継時性多重人格の分類に入るだろう。霊的存在が憑依しているときは、その存在に成りきっていて、その存在の一人称で語る。これは多重人格において他の交代人格に人格変換したときと同じような現象である。また、多くの多重人格者の人格変換時や、病的な憑依の患者の憑依時と同じく、霊的存在が憑依している間の記憶を保持していない場合が多い。病的な憑依・憑霊においては、自我の同一性や意識の主体性が傷害されていて、他者に操られていると感じ、基本的には自分自身が預かり知らないところで憑依状態に陥り、自分の意志とは無関係に行動してしまうが、シャーマンにおいては自分自身の意志で憑依状態に入り、その状態を制御し利用する点が、やはり一番の違いであると言える。

【脱魂と憑依の中間型】

：シャーマンが自分自身に守護霊を憑依させ、または守護霊に懇願して、守護霊がシャーマンの身代わりとなって、もしくはシャーマンと守護霊が一体化して超自然的領域である他界に飛翔する型。『憑霊とシャーマン』¹²⁾ (P.179)によれば、例えば、アムール川下流に住むオロチ族のシャーマンは、大きな雷鳴鳥のような守護霊の助けを借りて霊界を旅し、病人の魂を捉える。人間の病気は霊魂を失ったために起こるとされているため、シャーマンが霊界で病人の霊魂を取り戻すことに成功すれば、病人は治癒するのである。

この型のシャーマンは自分自身がとても弱い存在であるとされ、悪霊に対抗するためには全能の存在である守護霊に祈りを捧げ、守護霊をその身に宿して霊界を飛翔することになるのである。

このようにシャーマンは大きく脱魂型と憑依型に分けられる。このどちらの型が優勢であるかは、その地域の文化・社会的なものに大きく左右される。一般的に高度宗教定着地域では憑依が、未開社会では脱魂が良く見られるようである。また、シャーマンの具体的な他界描写は、脱魂型のシャーマニズムが濃厚な地域では一般的に見られる。シャーマニズ

ムは、霊魂や精霊についての観念を基盤とする呪術・宗教的な複合文化である。それは脱魂・憑依・他界・呪術などの多種多様な観念の組み合わせによって構築されるが、地域や時代の違いによって構成要素にも違いがみられる。他界観・霊魂観・精霊観・呪術的飛翔・治療儀礼などの要素がシャーマンの役割を巡って統合されシャーマニズム的な複合を形成することもあれば、良く似ている観念や儀礼があっても、それがシャーマニズムの構成要素から脱落している場合もあるようだ。

（４）シャーマンの役割に関する類型

次に佐々木宏幹の『憑霊とシャーマン』¹²⁾ (P.71, 72)を参考にして、シャーマンの役割に関する類型について、自分なりにまとめたいと思う。

【神秘家型】

：自我を無化することで霊的存在と合一の経験を有する者。これは後述する宗教的神秘体験と同様の現象であると考えることができる。

【霊媒型】

：霊的存在を自分自身に憑依させ、霊的存在自身として振舞う者。この型は憑依型のシャーマンの代表的な型である。この型の場合、シャーマンは第一人称で語り行動し、直接話法を用いる。霊媒は、シャーマン本人の意志力に寄らずに行動すると信じられており、行動する瞬間は霊的存在そのものであり、そのものとして振舞う。

【予言者型】

：霊的存在と霊視・霊聴・靈感などにより交流できる者。この型の場合、シャーマンは第三人称で語り行動し、間接話法を用いる。予言者は、個人的な意志力を多く保持し、霊的存在の言葉を引用するとしても、彼が話すのは霊的存在そのものとしてではなく、シャーマン本人としてなのである。

【治療師型】

：霊力や呪力を健康的な問題の解決に用いる者。薬などを作ったり、儀式により治病を行ったりする。

【呪術師型】

：霊力や呪力を現実的な問題の解決に用いる者。祈願や厄払いなどの儀礼を行ない、依頼者を助ける。

以上のような役割類型を1人(1種類)のシャーマンがこなしている場合もあれば、複数のシャーマンで分業している場合もある。これは、多重人格者の交代人格が1つの役割を果たす場合もあれば、複数の役割を同時に果たすこともある例と類似している。シャーマンの例は、社会に関することであり、一人の人間の内部で起こっている多重人格の例とは異なるはずだが、人間の心が社会を映した鏡のようなものであると考えれば、ここ数年で多重人格やその他の精神障害についてよく聞くようになったこと

も、社会の問題と何か関係があると考えられることもできるのではないだろうか。

(5) 記憶に関する問題

脱魂型のシャーマンはトランス状態から脱したときに、トランス状態での他界への旅行について他人に聞かせることが多いため、基本的にはトランス状態の間の記憶を保持しているようである。憑依型のシャーマンは、多重人格における人格変換と同様に完全に憑依させる対象に成りきっているために、トランス状態の間の記憶を保持していない場合が多い。しかし、同時性多重人格の場合と同様に憑依中の記憶を保持している場合もある。

自分自身の意志でトランス状態に入るという基本的な原則があるにも関わらず、記憶を保持している場合と保持していない場合があるのは面白い点である。

(6) 同一化の問題

シャーマンが同一化する対象は超自然的な存在、霊的存在である。霊的存在とは、独立の神格を有する存在である“神霊”，人間の“靈魂”，動植物や自然界のあらゆるものに宿る“精霊”，死者の魂である“死霊”，祖先の魂である“祖霊”，悪しき働きをする“霊鬼”，正体不明の存在である“妖怪”など多種多様である。シャーマンは、その文化風土や社会に対応した霊的存在に同一化することで役割を果たすのである。

病的な憑依においても、その同一化の対象は文化や宗教的なものに影響される。キリスト教圏では憑依する存在は神か聖霊か悪魔である。日本では死霊・祖霊・動物霊など、多種多様なものが憑依する。しかし、動物霊といっても全ての動物が憑依の同一化の対象となるわけではない。憑依において同一化の対象となる動物は、狐や猫や蛇のように擬人化しやすく、どこか神秘性を備えている動物である。雀やゴキブリといった動物は、普通、憑き物となることはないようだ。つまり、人間が何となく“不思議な力を持っていそうだ”と感じる動物に限られるわけである。

5. 宗教的神秘体験

(1) その定義

シャーマニズムと関連が深そうな体験に宗教的な神秘体験というものがある。この体験は体験した個人にとって非常に大きな宗教的な意味を持つという点が、他の解離性の現象との重要な差異である。つまりは、体験には篤い信仰心が少なからず影響を与えるということである。

フランク・W・パトナムによれば（『解離』²⁾ P. 257～P. 259），宗教的性格の中心は“分裂した心”であり，“分裂した心”はその人の生得的気質の不整合、異質性、知的・道徳的素質の統一不全として現われ

るとしている。

ウィリアム・ジェイムズは、『宗教的経験の諸相・下』¹⁵⁾ (P. 182～P. 215) において、個人的な宗教経験は“意識の神秘的状態”にその中心を持っており，“意識の神秘的状態”には次に述べるような4つの基本的特性があるとしている。

[絶言語性]

：この状態を経験した人間は、この状態のことをうまく表現することができない。この特性のため、この状態がどんな性質であるのかを知るためには、直接経験しなければならないということになる。この特性から考えると“意識の神秘的状態”というものは、知的な状態というよりも、むしろ感情・情動の状態に似ているといえる。（P. 183 参照）

このことは、多重人格における交代人格間の脳波の違いが、全く別人の脳波の違いというよりも、同一人物の感情や情動の変化による脳波の違いに近いということと類似性が見られる。

[認識的性質]

：神秘的状態は、その状態を経験した人々にとっては知識の状態でもある。神秘的状態とは、比量的な知性では量り知ることのできない真理の深みを洞察するような状態である。それは明瞭に言い表すことはできないが、意義と重要さとに満ちている。そして普通、その経験以後は、その体験はその人にとって一種奇妙な権威の感じさえ伴う体験となるのである。つまり、その人のその後の人生にとって、とても大きな影響を与えることになるのである。（P. 184 参照）

[暫時性]

：神秘的状態は、長い時間持続することができない。長くてもせいぜい1時間か2時間が限度らしく、それ以上になるとその状態は薄れて日常の状態に戻ってしまうのである。日常の状態に戻ってしまえば、大抵、神秘的状態の性質は不完全にしか呼び戻すことができない。しかし、その状態が再発すれば、その状態であると認めることができる。再発を繰り返し、絶えず発展していく場合もあるが、その場合は再発の度毎にその体験の内面の豊かさと重大さとがますます強く感じられるようになるようである。（P. 184 参照）

[受動性]

：神秘的状態の出現は、意識を集中するなどの自発的準備動作により容易にすることが可能である。しかし、この特殊な性質の意識状態に入ってしまうと、体験者は、まるで自分自身の意志が働くことをやめてしまったかのように感じるのである。この特性は、神秘的状態が記憶を失うような心理的状态であると思わせるが、厳密な意味での神秘的状態は、内

的生活の中絶的なものではなく、その状態の記憶が常にいくらかは残り、その状態に対する重要性の意識が後に残る状態のことなのである。(P.185 参照)

まとめると宗教的神秘体験とは、“個人的に重要で宗教的な意味を持つ精神的な体験であり、その体験はうまく表現することはできないが、体験者にとっては非常に重要でその後の人生に大きな影響を与えるような体験”であるといえる。

(2) 発生原因

宗教的神秘体験は、シャーマン化の方法の召命型と同じように、その人の人生における重大な個人的精神の危機が原因である場合が多い。そして、その後の人生を大きく左右するほどの影響を与えるのである。体験以前から信仰心が篤い場合と、回心のようにその体験により信仰心が篤くなる場合とがある。ウィリアム・ジェイムズによれば(『宗教的経験の諸相・上』¹⁵⁾ P.265)、宗教はしばしば、最も耐え難い悲惨をも、最も深く永続的な幸福に変形させるのである(しかし、宗教を見出すことは、内心の統一と安定に達するための方法の1つでしかなく、内心の不完全さを治療し不調和を改める過程は、一般心理学的な過程であり、全ての心的生活においても行なわれうるものである)。

また、シャーマンと同様に祈りや修業を重ねることによって、自分自身を意識の神秘的状態である恍惚状態に導く場合もある。祈りや修業による場合でも、心身的に極度の疲労状態で神秘的体験を経験する機会が多い。また、教会などにおける祈りや歌、儀礼などの中で集団催眠のような状態になり、そこから宗教的神秘体験を経験する場合もある。このような例は、ロックミュージックのコンサートなどにおける目眩が起こるような体験と類似しているように思われる。

やはり、他の解離性の現象と同様に、疲労や精神的葛藤など心身が極限状態に陥ることで、意識が通常とは異なる状態に入り込むようである。

(3) そのパターンや類型

宗教的神秘体験の最も単純な型は、ある文章や格言の持っている深い意味が、何かのはずみに一層深い意味を帯びて突然に閃くという場合である。また、普段よりも一層深い意義が感じられるのは、なにも筋道だった文章だけではなく、たった一語でも、一語句でも、海や陸の光の作用でも、芳香でも、楽の音でも、心の調子が正しく合わさってさえいれば、全てが深い意味を感じさせる可能性があるのである。もちろん、それだけではなく、神秘的な体験にも一定のパターンや類型というべきものが存在する。

[既視感]

：“前にここにいたことがある”という、我々を時々襲ってくる突然の感情。いつか、遠い遠い昔、ちょうどこの同じ場所で、この同じ

人々と、全く同じことを話したことがある、というような感覚である。

吉本隆明も『共同幻想論』の中で、既視感について次のように述べている。

「極度に疲労して歩いているとき、いまおっている道が、じつははじめてとおった旅先の道であるのに、いつか視たことがある風景のようにおもわれてくる」、「あるいは、なにかの心の状態にあるとき、ふとこの心の状態はじぶんが繰り返して体験してきたある心的状態とおなじだと感じながら、元になる体験の記憶にどうしてもつながつてゆかない」体験である。(『共同幻想論』¹⁶⁾ P.53, 54より引用)

[臨死体験]

：死に直面したときに、荘厳な風景や美しい景色を見たというような体験。それが宗教的な意味を帯びたときには宗教的な神秘体験となる。どのような文化圏でも、大抵は花畑を見たとか、長い長いトンネルをくぐったなど共通性が見られる。また、死んだ親族に会ったとか、自分自身の身体を外側から眺めたという体験もよく聞かれる。このような体験は、シャーマンにおける体外離脱体験、異界旅行体験と非常に類似しており、共通性が認められる。

社会・文化が異なっているのに、共通性が見出せることはとても面白い。長いトンネルをくぐるというのは、赤ちゃんのときに産道を通して現世に産まれてきたことを覚えており、そのときの体験を死に直面して、オーバーラップさせているのだという話をTVで耳にしたが、この話もシャーマンのイニシエーション過程が“死から再生”というモチーフをシンボルとしている点と類似性が見られる。シャーマンは、“死”と同様に困難なイニシエーション体験を経てシャーマンへと“生まれ変わる”わけだが、臨死体験も“死”に直面し、“生還”することにより、その後の人生にとって重要な意味を得る、つまり“生まれ変わる”というわけである。

[神や世界との合一体験]

：神や聖霊などが自分と一体となる体験。神と対話したり、自分自身の身体境界が無くなり、ついには世界と一体化してしまうと感じるような体験。仏教などにおける悟りや、ヨーガにおける三昧などがその例である。また、キリスト教における聖職者たちの神との対話もこれに含まれる。聖女テレサなどに見られる恍惚状態なども、この体験に含まれる。聖なる病と呼ばれるこのような体験は、癲癇発作であり、器質的な原因があるとされていたこともあるが、現在では心理的な原因があるヒステリーであるという見方もある。

[舌語り・異言 (Glossolalie)]

：宗教家や神秘家が意識の神秘的状態、恍惚状態の中で当人の意志とは無関係に文節不明瞭な音声を発する現象。原始キリスト教ではしばしば起り、聖霊が人間に語らせる言葉であると思われる。 “異言”は明らかに“音節”があるため、ただの“音”ではなく、また、その“音節”が“抑揚”を伴っている。聞いている者や、語っている本人にさえ霊的・精神的に語りかける響きがある。また、この“異言”は、ミルチア・エリアーデが『シャーマニズム』¹⁴⁾において述べているシャーマンの“秘密の言語”にも共通点が見出せる。ただ、シャーマンの“秘密の言語”は一般人には理解できないが、シャーマンにとっては意味のある言語である。シャーマンは、この言語を師匠となるシャーマンより伝授される。しかし、“異言”は、語っている本人にも意味は分からない。その点が大きな違いであるといえる。

〔自動書記〕

：宗教家や神秘家が意識の神秘的状態、恍惚状態の中で当人の意志とは無関係に手に持った筆記具で、聖書の一節などの文章を書くこと。自動書記中は、手や腕が勝手に動く体験で、このとき神秘家は“させられ体験”を経験するのである。自動書記はシュルレアリスムに含まれ、アンドレ・ブルトンによれば、「心の純粋の自動現象であり、それを通じて口頭、記述、その他あらゆる方法を用いて、思考の真の働きを表現することを主目的とする。理性によって行使されるどんな統制も働かない、美学上、道徳上の一切の懸念から解放された、思考の書き取り」である（『ダダ・シュルレアリスムを学ぶ人のために』¹⁷⁾ P.105 より引用）。また、濱田明らによれば、自動書記は「意識と無意識の間の隔壁を下げることによって、抑圧されている人間の心の活動を解放する」ような現象なのである（『ダダ・シュルレアリスムを学ぶ人のために』¹⁷⁾ P.106 より引用）。

宗教的神秘体験の類型は、人間の宗教的文化に携わってきたという特徴から、シャーマニズムと類似する点が数多くあるようである。そして、神や聖霊との合一体験のときに神や聖霊になりきっている状態は、シャーマンの憑依状態や多重人格における交代人格と同様の状態であると考えることができる。

（４）記憶に関する問題

神や聖霊と合一し、その存在に成りきっているときや、異言を語っているときの記憶は、普通は保持していないようである。その他の体験については、はっきりと克明に記憶を保持し体験の説明ができるというわけではないが（通常は上手く説明できない）、おぼろげながら体験の記憶を保持している。しかし、その体験の影響力は大きく、その体験が自

分にとって重要な意味を持つという感覚は強く残るようである。

（５）同一化の問題

神仏や聖霊など、その社会・地域における宗教や文化により、同一化の対象も異なる。

しかし、シャーマンにおける憑依現象や、多重人格における交代人格とは違い対象を自分の中に取り込む、同一化するというよりは、自分自身の精神を拡大させて広げていき、対象となる神仏または世界や宇宙と一体化させるという感じを受ける。この点が他の現象との違いであり、重要な点であると思われる。吉本隆明は「＜聖女＞にとって理神論的なく神＞は幻想の＜性＞的对象である。そしてこの＜聖女＞にとって、はじめに＜神が在る＞ことは理念として前提されているため、この＜神＞は共同幻想と拡大された自己幻想との二重性を意味している。この＜聖女＞は拡大され至上物に祭りあげられた自己に憑いている」（『共同幻想論』¹⁶⁾ P108 より引用）と述べている。これはつまり、自分の意識を研ぎ澄ますことで拡大させていき、人々の共通の観念であり、大きな幻想である＜神＞という存在に同一化していくという意味であろう。

6. ヒステリー

（１）その定義

多重人格やシャーマニズムなどと深く関わりを持つと考えられるものにヒステリーがある。かつて多重人格や憑依を含むその他の多くの精神障害は、その大部分がヒステリーであると見なされていたのである。J=D・ナシオによれば、ヒステリーの定義は「特別な事件や患者の人生の危機的な時期、例えば思春期等に発症する神経症のことであり、「運動障害」「感覚障害」「知覚器官障害」「不眠」「失神」「意識や記憶、知能の変容」などの多彩な障害を伴う症状である（『ヒステリー』¹⁸⁾ P.12, 13 より引用）。例えば、身体のどこかの部分が痛みを感じなくなったり、目が見えなくなったり、歩けなくなったりなどという症状が起こる。ただし、上記の定義で示されている身体的な障害は、一過性のものであり、何らかの器質的な原因に由来するものではなく、症状がどこに現われるかという身体的な局在性については解剖や生理のどんな原則にも従わないのである。ヒステリーにおいて、“身体的障害は器質的な原因に由来しない”という部分が、多重人格における“身体障害者人格や無痛覚・無感覚人格”，シャーマニズムや宗教的神秘体験における“痛みや熱さを感じない状態”などと特に関連が深いように思われる。なぜなら多重人格では、身体的な原因ではなく心理的な原因から、目が見えなくなったり、身体が動かせなくなったりするが、後述するようにヒステリーもその原因は心理的なものだからである。また、多重人格の人格変換時に起こることがある失神など

も、ヒステリーに見られる失神と同様のものではないかと考えることができる。

ヒステリーとは上記の定義でも述べたとおり神経症である。では神経症とは一体どういったものなのだろうか。フロイトの『著作集6』¹⁹⁾(P.7~P.17)やナシオの『ヒステリー』¹⁸⁾(P.24)によると、神経症とは、人間が無意識の耐え難い心理的負荷に対抗して知らず知らず使用している不適切な防御方法のことである。この防御方法には“転換”“転置”“排棄”の3つがあり、それぞれの防御方法に従って、転換はヒステリー、転置は強迫症・恐怖症、排棄は幻覚的錯乱状態というような別々の症状があらわれる。ではそれぞれの防御方法を以下に簡単に示す。

[ヒステリー] (転換 Konversion)

：自我と和解できない表象（心理的な負荷、嫌な記憶など）が、連想作用を起こさない弱い表象に変更されるように情動興奮量が分離される。この分離された情動興奮量（精神的なエネルギー）は、身体的なものに置き換えられ、身体的な障害となる。（『著作集6』¹⁹⁾P.10 参照）

[強迫症・恐怖症] (転置 Transposition)

：自我と和解できない表象（心理的な負荷、嫌な記憶など）の情動興奮量が、他の和解し易い表象に付着する。自我を悩ませる不快な情動興奮量は不変のまま残り、ただ自我と和解できない表象の記憶だけが排除される状態。強迫観念は、和解し難い表象の代用・代替物なのである。（『著作集6』¹⁹⁾P.13, 14 参照）

[幻覚的錯乱状態] (排棄 Verwerfen)

：自我と和解できない表象（心理的な負荷、嫌な記憶など）が、自分の外部・外界に排除され、恐怖対象として外的環境要因に結晶化される。（『著作集6』¹⁹⁾P.15, 16 参照）

また、精神的に自分自身に言い聞かせたり思い込んだりすることで、実力以上の力が出せるという一種の自己暗示のような例をよく耳にするが（例えば試験や試合の前日などに勝った場面、受かった場面を想像するなど）、ヒステリーが心理的な負荷を身体的な障害に置き換える防御方法だとするならば、思い込みで実力以上の力が出せるという例は、心理的な高揚や正の興奮量を身体的な力に置き換えていると考えることができるのではないだろうか。精神的なものが身体的なものに影響を与えるという事実は、集中することで仕事の効率が上がるという解離のメカニズムとも関係があると思われる。

(2) 発生原因

ヒステリーの発生原因も多重人格などと同様に、心理的な極端な負荷である。ナシオによれば、「ヒステリー神経症は他のすべての神経症と同様」、「意識されず強い情動負荷を受けた」心に巣くって

いる「寄生観念の病的形成活動によって引き起こされる」（『ヒステリー』¹⁸⁾P.26 より引用）ものである。心的外傷が病の原因として成立するのは、「意識の中には感じられないが無意識には受け取られる性的情動の過剰が現われるから」（『ヒステリー』¹⁸⁾P.27 より引用）である。ここでいう外傷とは、外部から来る暴力そのものことではなく、暴力によって残された精神的痕跡のことである。“外傷があった”ということは、本来現われるべき“不安”もしくは“情動の発散”が欠けていたということである。つまり、通常なら何かを体験したときに、その場で発散されるべき感情や情動が発散されずにその精神的・心理的なエネルギーがそのまま残っている状態であると考えられる。そして、外傷体験以降、子供の無意識には同化されないまま過度の緊張が住まうことになり、この過度の緊張、発散されないまま残っている心理的エネルギーがヒステリー症状の核となるのである。つまり、ヒステリーの本質は、過剰なエネルギー負荷を心的な全体から孤立した一つの要素（身体症状など）に閉じ込めることなのである。この働きは、心的外傷体験の記憶や情動をある交代人格の中に封印する多重人格の場合と共通の働きであると考えられることができるだろう。

ヒステリー現象を引き起こすことになった原因も多重人格の場合と同じように、なかなか明らかにはならない。理由としては、患者自身がその体験のことを記憶していなかったり、原因となった出来事と病的現象との因果関係について気付いていなかったりする人が多い。また、単純に患者がその体験を語ることを不愉快に思っているために、語らないという場合もある。

多重人格などと同様に、1つの大きな外傷体験が原因となっている場合もあれば、複数の小さな外傷体験が群となって原因となっている場合もある。

(3) 症例

ここで原因と症状について分かり易くするために、以下にフロイトの『著作集7』²⁰⁾の中から、具体例を2例挙げようと思う。

「病歴 A. エミー・フォン・N 夫人（『著作集7』²⁰⁾P.23~P.78）」

<エミー・フォン・N 夫人（40歳・リーフランド生まれ）>

[症状]

- ・様々なことに驚きやすい。
神経質である（些細なことでも考えすぎる）。（P.40 など）
- ・幻覚や妄想、過去の体験の生々しい再生。（P.28 など）
これは心的外傷後ストレス障害（PTSD）と同様の症状である。
- ・関節痛や頭痛などの身体的な症状。
食事をごく少量しかとらない（吐き気がする）。（P.55 など）
- ・吃り、舌打ち、錯乱発作の時に「エミー」と自

分の名前を呼ぶ事、「動かないで！——何も言わないで！——私に触らないで！」という呪文を唱える事、などのチックに似た運動。(P.31 など)

(「動かないで！」という言葉は、彼女の気分が悪い時に現われる様々な動物の幻覚が、誰かが彼女の前で少しでも動く彼女に飛び掛ってくることと関係している。

「触らないで」という警告は、彼女の兄が多量のモルヒネで発作を起こし、突然彼女に抱きついたことや、知人が急に気が狂って彼女の腕をつかんだことや、彼女の娘が大病を患ったときに朦朧状態で激しくつかみかかったことなどに由来している。)

[「何故びっくりしやすいのか」という質問に対して夫人が答えた外傷的要因 (P.27~)]

- ・5歳の時、兄達に死んだ動物を何度も投げつけられ、気絶してひきつけを起こした(初めての発作)。
- ・7歳の時、お棺に入れられた姉の姿を見た時に発作を起こした。
- ・8歳の時、たびたび兄が白い布をかぶり、お化けだと言って脅かした。
- ・9歳の時、お棺に入っていた叔母の下顎が急にぐんと落ちた。

(彼女は、これらの体験をしばしば念頭に浮かべる。そして、その体験のことを考えると、いつもその場面が現実にあったままの生々しさで目の前に浮かぶのである。)

[「思い出す毎に後々まで恐怖を感じる体験が他に無いか」という質問に対して夫人が答えた外傷的要因 (P.29~)]

- ・15歳の時、従姉が精神病院に連れて行かれる所を目撃した。
(大声で助けを求めようとしたがそれができず、その日の夕刻まで口がきけなくなった)
- ・15歳の時、母親が卒中を起こして床に倒れているのを見た。
- ・19歳の時、家に帰ると母親が顔を引きつらせて死んでいた。
(また彼女は、以前に女中からぞっとするような精神病院の話聞いていたので、精神病院に対する恐怖の観念を持っていた。)

エミー・フォン・N夫人の症状においては、上記で説明されていたヒステリー症状の核となる発散されないまま残っている心理的エネルギーは、不機嫌・苦痛・憤懣・吐き気・不安などの外傷体験についての感情や情動である。そのエネルギーが頭痛や関節痛などの身体的症状に転換されているようである。

「病歴 E. アンナ・O嬢(『著作集7』²⁰⁾ P.153 ~ P.177)]

この病歴は、ブロイアーによる報告である。彼女の性格的、身体的な特徴は以下の通りである。

- ・性格の最も本質的な特徴は、同情に富んだ善意である。
- ・気分は愉快になるにしても悲しみに沈むにしても、すぐに度をはずす傾向があり、そのために“むら気”の傾向もあった。
- ・発育期には神経質な所は何も無く、いつも健康だった。
- ・優れた知能と、驚くほどの統合力と、鋭く見抜く力を備えていた。
- ・詩的で想像力豊かな天賦の素質もあり、その素質も非常に鋭くて批判力を持った悟性によって統御されていた。
- ・上記の悟性により、彼女は暗示のかけ難い人物であった。
- ・性愛的な要素が発達しておらず、彼女の生涯には恋愛するという事はなく、病気のためのおびただしい幻覚の中にも心情生活における性愛的な要素は決して浮かび出てこなかった。

アンナ・O嬢は、21歳の時(1880年)に病気になり、その病気は、次のような4つの病相に区分できる。

[潜伏期(1880年7月半ば~1880年10月10日)]

- ・1880年7月、彼女がひどく愛していた父親が胸膜周囲膿瘍で倒れる。
- ・父親の看病の間に徐々に弱り、その後、神経性の咳嗽を示すようになる。

[はっきりとした罹患期(~1881年4月?)]

- ・左後頭部の痛み。
- ・興奮状態で強度を増す交叉性斜視(複視)。
- ・「壁が倒れ掛かってくるようだ」という訴え(斜眼筋の疾患)。
- ・分析困難な視覚障害。
- ・前頸筋の麻痺、右側上肢や両側下肢の拘縮と知覚麻痺、左上肢の不全拘縮麻痺、項部筋の不全麻痺などの症状。
- ・以下の2つの意識状態が存在する。
 1. 悲しげで不安があるようだが、比較的正常。
 2. 幻覚があり、不寐である。彼女の言う所の第二状態。

この2つの意識状態は、明らかに多重人格の交代人格だと思われる。

- ・深刻な言語機能の解体が起こり、徐々に言葉が出なくなり無言になる。
- ・1881年3月、上下肢の運動がまたできるようになった時期と重なり、英語だけを話すようになる(本人はドイツ語を話しているつもりで、しかも周囲のドイツ語は理解している)。
- ・調子の良い時は、フランス語かイタリア語を話した。
フランス語・イタリア語を話すとき、英語を話すときでは、それぞれに互いの状態の記憶に

健忘が現われ、この症状は、各状態がそれぞれ多重人格における交代人格であることを示唆している。

[持続的な夢遊がきては、やがて正常状態と交換する時期(～1881年12月)]

- ・1881年4月5日、父親死亡後、ものすごい興奮に続いて深い混迷が2日間続く。その後は、初めはかなり落ち着いており、不安感情も減退。
- ・高度の視野狭窄が起こり、他人の顔などの判別が困難になる。
- ・そこにいる人物が全く見えないという“陰性幻視”も起こる。
- ・ドイツ語で話しかけても理解できず、英語だけを話す。
このとき、フランス語とイタリア語は読めた。
- ・午後には傾眠、日没前後は深い催眠状態に陥る。このとき、恐ろしい怪物や、死人の首や、骸骨で満たされた幻覚を見る。

[徐々に諸状態・諸現象が解消されていく時期(～1882年6月)]

- ・二つの意識状態の区分が以下のように変化する。
 1. 他人と同じく1881～1882年の冬を過ごしている。
 2. 1880～1881年の冬を過ごしていると思っている、加えて、その後に起こったことには健忘がある。ただし、父親が死亡していることだけは分かっている。

アンナ・O嬢の症例は、明らかに解離性同一性障害(多重人格)であるといえる。このように、以前は多重人格を含め、さまざまな精神障害がヒステリーであると診断されていたようである。この事実は、精神的な障害同士が多数の共通項を持っているということを示してくれる。つまり、多くの共通項を持っているために、ある一つの診断を受けていた、といえるのである。

(4) そのパターンや類型

よく見られるヒステリーの症状としては、以下のようなものがある。

[頭痛、偏頭痛、関節痛などの身体の痛み]

：ヒステリーの中で最も多く見られると思われる症状の一部。フロイトの症例であるエミー・フォン・N夫人や、エリーザベト・フォン・R嬢、カタリーナなどに見られる。(『著作集7』²⁰⁾ P.23, 107, 96)
これら身体の痛みの中でも頭痛が最も多いようである。多重人格でも、抑鬱的で精神的に弱っている主人格は、頭痛に悩んでいる場合が多く、関連が見られる。

[幻臭・幻視・幻聴]

：実際には存在しない“何か”の匂いがしたり、見えたり、聞こえたりする。エミー・フォン・N夫人は、幻覚や妄想、過去の体験の生々しい再生に苦しんでいたし、ミス・ルー

シー・Rは焦げたプディングの匂いや葉巻の臭いに苦しんでいた。(『フロイト著作集7』²⁰⁾ P.23, 78)

これらの現象は、多重人格や、シャーマニズム、宗教的神秘体験においても頻繁に起こる現象であり、類似性が認められる。例えば、多重人格では、鏡の中に実際とは違う自分の姿を見るし、シャーマンは、精霊などの霊的存在の姿を見ることが出来る。そして、宗教的神秘体験では、経験者はこの世のものとは思えない荘厳な風景を見るのである。

[無痛覚・無感覚]

：身体に痛みや感覚がない。ミス・ルーシー・Rは、かなり明白で全身的な痛覚喪失を示しながらも、触覚には何の異常も見られないという面白い症状を示していた。(『フロイト著作集7』²⁰⁾ P.78)

多重人格においても無痛覚・無感覚人格は存在するし(モートン・プリンスの『失われた<私>を求めて症例ミス・ビーチャムの多重人格』⁷⁾の症例では“サリー”という交代人格は全く痛みを感じなかった)、シャーマンや宗教神秘家も修業の一環として焼いた石の上を裸足で歩く(熱さは感じていない)など、同様の例が見られる。

[目が見えない・耳が聞こえない・身体が動かない]

：視覚や聴覚に器質的な異常がないのに、目が見えなくなったり、耳が聞こえなくなったりする。また、身体や四肢などを動かそうとしても動かさない。多重人格においても、それぞれこのような症状を呈する交代人格が存在する。

例えば、『24人のビリー・ミリガン』⁹⁾のショーンという交代人格は、器質的な原因はないのに耳が不自由である。

これらヒステリーの症状の特徴を見ていくと、今までに紹介してきた多重人格・シャーマニズム・宗教的神秘体験などと驚くほどの類似性があることが分かる。

また、ヒステリーの特徴の一つとして、性に関する事柄がある。ナシオによれば(『ヒステリー』¹⁸⁾ P.13)、ヒステリー患者の身体は、性に対する強い抑制を受け驚くほど無感覚化された性器部分と、逆に非常にエロス化されて、常に興奮に晒されているかのように見える非性器的な残り全ての部分に分けられてしまっている。つまり、本来の性器部分が無感覚化され、性器以外の他の部分が性器化しているのである。ヒステリー者が転換症状において体験する苦痛は、オルガスムの満足と等価であり、転換の

表1. 癲癇とヒステリーの違いに関するまとめ
 : それぞれ左右の項が対応する項目となっている.

癲癇	ヒステリー
最初に叫び声があり、顔面蒼白になる	叫び声はなく、顔面は赤く腫れ上がる
痙攣は限定された攣縮と一律の拘縮からなる	痙攣ははっきりせず、不規則で、間隔は大きい
持続時間は常に短い	持続時間ははるかに長い。痙攣期はさまざまな悪化を示し、丸一日続くことがある
発作を中断させる手段はない	適切な操作で発作を終わらせる事ができる
不治であり、知的衰弱が見られる	後遺症なく治療が可能である
発作はほとんどつねにこれといった原因なしにあらわれ、あきらかな動機なしに起こる	発作は非常に短い間隔では起きないが、ほとんどつねにそれとわかる原因がある
発作はヒステリー発作ほど頻繁に起きないし、規則正しい間隔で起きない	発作が、一日に数回か、毎日か、一定の時期に起こる場合だけそれとわかる原因がある
心窩部が出発点になることはない。ときどき前兆があり、前兆は四肢にその座がある	発作はほとんどつねに、最初の出発点か、副次的な出発点をもっていて、その点は心窩部であることがもっとも多い。胃が最初の不快感の座でない稀な場合には、不快感は脳か、四肢から発する
意識喪失は瞬間的である。二、三の稀な場合だけ、意識喪失が前兆に先行する	意識喪失のいくらかまえに、ヒステリー球と絞扼感がある
てんかん患者は、その人にもっとも多くの利益をもたらす仕事場でも突然倒れる	ヒステリー患者は、倒れるまえに、避ける場所をみつける時間がある
痙攣は生理学的状態で起こる運動に似ていない一種の強直性痙攣である	痙攣は、情念、感情、あるいは私生活の普通の行為の身振りと関係がある
つねに口から泡を出す	めったに口から泡を出さない
発作の終わりには何も特別なことはなく、患者はただ目を覚ましているように見える	発作はすすり泣きか涙で終わり、非常に稀ないくつかの症例では睡眠でおわる。ついで特徴的な尿を排泄する
発作後、ときに頭痛がある。頭痛は二、三時間しか続かない。その他、不快感はない	発作後つねに二十四時間、頭痛、不快感、四肢の痛みがある
発作は短い時間続き、最大でも、十ないし十二分である	発作はかなり長い間続き、少なくとも十五分である

場所である身体部分は、性的器官の価値を取るということは、ヒステリー患者が苦痛を訴えている部分を刺激すると恍惚とした表情をするということからも理解できる。また、このことは宗教的神秘体験における恍惚感とも共通性があると考えることができる。

また、ヒステリーは器質的な原因がある癲癇と混同されやすいが、その症状をエティエンヌ・トリヤの『ヒステリーの歴史』²¹⁾ (P.193, 194) のドウラジオーヴやブリケによる癲癇とヒステリーの比較を参考にしてみても、表2のようにまとめることができる。表2を見ても分かるとおり、似ている部分もあるが、しっかりと別のものであると理解することができる。ヒステリーと癲癇については、フロイトが次のように述べている。

「「癲癇的反応」は、疑いもなく神経症によっても利用されるのである。神経症の本質は、自分の力では心理的に処理しえないだけの量の刺激を肉体的な手段によって解消しようとする点にある。癲癇の発作がヒステリーの一

症状とされるのはこういう理由にもとづくのであり、それは、通常の性交による場合と同様、ヒステリーによって調節され変形されるのである。したがって、器質的な原因にもとづく癲癇と「心理的」な癲癇とを区別することはまったく正当であり、この区別には実際的な意味がある。すなわち前者を持っている者は脳に故障のある人間であり、後者を持っている者は神経症者なのである。前者の場合、その精神生活を操っているのは、精神生活とは無縁の外部的障害であり、後者に見られる障害は、精神生活自体の一表現である。」

(『フロイト著作集3』²²⁾ P.416より引用)

(5) 記憶に関する問題

ヒステリーにおける幻覚などの発作時の記憶は、朦朧としていてあやふやな場合も多いが、基本的には保持しているようである。この点は、宗教的神秘体験と同様であると考えられることができる。

ヒステリーの原因となった事件の記憶については忘れていて、またはそれと気付いていない場合が多い。この点は、多重人格と共通性があると考えるこ

(6) 同一化の問題

フロイトによれば(『著作集2』²³⁾ P.127), ヒステリーにおける同一化の対象は, “愛される女性”でも“愛する男性”でも“彼らに共通の性的不満足”でも“この光景から離れた第三の人物”でもなく, これら全てを同時に対象とするのである。つまり, ヒステリーにおける同一化の中心対象は, 画然とした一つの対象ではなく, 幻想下のカップル二人をそれぞれ結び付ける“関係”なのである。つまり, ヒステリーの主体が同一化する対象は“男性”であり, “女性”であり, “彼らの出会いから排除された第三者”であり, “彼らを別れさせる苦痛”であり, “彼らを集わせ, これを含むようになる空間”なのである。「この手段に訴えてこそ患者たちは, (自己自身の諸体験のみならず) たくさんの人間の諸体験を彼らのヒステリー的諸症状のうちに再現し, いわば一群の人間たちの身代わりとなって悩み, ある芝居のすべての役柄を, 自分ひとりで自分の個人的な諸手段だけを駆使して演じてみせることができるのである」(『著作集2』²³⁾ P.127より引用)。この“内的なまとまり”ともいえる1人でドラマの全ての役割を全て演じることができるという点は, 多彩な複数の交代人格が頭の中において会議でもするかのよう話し合うビリー・ミリガンの交代人格たちの例を彷彿とさせるものがある。また, この“空間”に同一化するという点は, 吉本隆明が『共同幻想論』¹⁶⁾ (P.107, 108) で述べている, 聖女が神と合一するときは, 拡大化された自己幻想が神という共同幻想と同化しているという点と共通性が見出せるように思われる。また, フロイトによれば(『フロイト著作集3』²²⁾ P.415), ヒステリー性の癲癇というものが存在し, この病気は, 古くからモルブス・サケル(神聖な病気)と呼ばれていたようである。その点からもヒステリーは, 宗教的な神秘体験と深い関係があると考えられる。

7. 心的世界の新しい構造モデル

まずは, 多重人格のみについて考察することで構築された心的構造モデルについて見ていきたいと思う。そして, そこからの発展型として新しいモデルを提案することにしたい。

(1) 交代人格の形成の核

人間に喜怒哀楽などの感情が発生するのは, ある事象が起こったときにその状況に応じて, 感情に関係するニューロンが興奮しているからだと考えられている(このとき, 感情に関係するニューロンの興奮の仕方により, 喜怒哀楽のどの感情が発生するかが決定されると考えられている)。また, 感情に関係するニューロンを興奮させる因子は, その感情が開放されるか, もしくは時間が経過すると薄れてく

る。後々になって, ある事象を思い出しても, まざまざと感情までがよみがえらないのはそのためである。この状態はフロイトのいう除反応がうまくできている状態である。しかし, 感情に関係するニューロンを興奮させる因子が強力すぎる事象(心的外傷体験など)の場合, 例えばその人物がまだ幼く, そのままその感情に関係するニューロンを興奮させてしまうと精神に異常を引き起こしてしまうような場合, 防衛機制が働いてその事象は感情の開放(除反応)がされずに抑圧され正常な部分から解離されてしまう。この場合は正常な場合とは違い, 感情の解放(除反応)がなされなかったために感情に関係するニューロンを興奮させる因子がそのままの状態でも保持されることになる。つまり, 精神的にはエネルギーの水準が高レベルのまま保持されるわけである。この高レベルの精神的エネルギーを“トリガー”と呼ぶことにする。このトリガーが人格を形成する上での核となっているのではないだろうか。この正常な部分から病的に解離された高レベルの精神的なエネルギーを中心として, 多種多様な要素(記憶・感情・性格断片・技能など)がまるでネットワークを形成するかのように人格の基礎となるものを創りだし, その人格の基礎となるものが同一化によって個性を獲得して交代人格が形成されるのではないかと考えることができる。人格の基礎となるものが同一化する対象は, 虐待者・TVのキャラクターなどで(本論文3.(8)参照), トリガーの属性(属性とは, そのトリガーが喜怒哀楽のちで, どの感情を誘発する因子であるかということ)や構成要素によって取り込まれ方が変わり, これによって多彩な交代人格が形成されるのだと考えられる。例えば, 虐待されたときのやり場のない怒りを誘発するトリガーを核として, 虐待者を取り込んだ場合, その人格は迫害者人格になると予想できるし, 逆に満たされることの無かった希望・喜び・愛情などを核として, TVのヒーローなどを取り込んだ場合, その人格は救済者人格や保護者人格になると予想することができる。

また, このようにして高レベルの精神的エネルギーを切り離していくためにオリジナル人格や, 主人格は活力の無い抑鬱的・否定的な意識状態へと変わっていくのではないかと考えられる。

(2) 交代人格形成の構成要素

では, 交代人格を形成している構成要素とは一体どのようなものなのだろうか。これは, その人のバラバラになってしまった記憶や性格の断片や, 特殊な才能や技能ではないかと考えられる。記憶や性格がバラバラの断片になってしまう原因は, 基本的には先程も述べたとおり心的外傷体験である。心理的・精神的に耐え難い体験を経験したとき, その体験の記憶を想起しないようにその記憶を断片化してそれぞれを抑圧しておくのである。このため, 虐待の記憶は一人の交代人格ではなく複数の交代人格が

分割して持っていることが多いのである。複数の交代人格が記憶を分割して保持している場合、それらの記憶は部分的な記憶や単なる感情の断片であり、完全な記憶に戻すためにはそれらの記憶断片を組み合わせて復元する必要があるのである。パトナムが『多重人格性障害』⁶⁾ (P.274) で次のような例を挙げている。「ある女性患者では」、「汽車の音が圧倒的な病的恐怖感をかきたてた」。「患者は、この刺激からどんな記憶も連想することができなかったが、通り過ぎてゆく機関車や列車の警笛の音を聞くと、交代人格が早い速度で入れ変わった。人格たちはそれぞれ不安、恐怖、悲しみ、怒りの感情を示した。怒りの人格は、父親を殺すぞ、あいつは最低の奴だからと脅かしのことをばを吐いたが、具体的なことは何も話さなかった。悲しみにうちひしがれた人格のほうは、孤立した中西部の農場で彼女の唯一の友達だった犬の死を嘆いていた。恐怖におののく人格となると、一家の農場の裏を走る鉄道の線路に父親がその犬を縛りつけているのをじっと見つめていた、と語り、不安に満ちた人格は、今なお「お前もいつかはこうなるぞ」という脅しから逃れられずにいた。ここで蘇った記憶は、父親が自分のペットを取り上げ、鉄道の線路に縛りつけて、患者の目の前で悲鳴を上げる犬がとうとう貨物列車に轢かれてバラバラになるのをじっと見つめさせたというものだった。父親は、もし父親がした近親姦の行為を誰かにばらしでもしたら、お前も同じ目に遭わせてやるぞと脅かしたのであった」(『多重人格性障害』⁶⁾ P.274より引用)この例からも分かりますとおり、心的外傷体験の記憶は、複数の交代人格が感情と共に断片化して保持しているのである。

また、虐待を行なう親も普段からいつも虐待を行なっているわけではなく、このような場合に幼い子供は、その親の両面性から、それが同一の人物であると解釈することができず、それぞれ別の人物として記憶する。加えて、親の態度により自分の性格や態度も使い分けられるようになるだろう。こうして楽しい記憶と辛い記憶も断片化され、怖い親に対する自分と優しい親に対する自分というように、性格も断片化されていくのである。この、怖い親と優しい親を別々の存在であるとして解釈し、別々の存在に接する様に接するという防衛機制は、精神分析ではスプリッティングと呼ばれているものである(『多重人格』⁸⁾ P.68~P.70)。このスプリッティングという防衛機制は、健忘を伴うものではなく、その点で解離の概念と同時に考察されることは無かった。そのため多重人格のメカニズムを考察する際にも、異なった症状の例として挙げられるだけだった。しかし、スプリッティングという防衛機制も交代人格形成のための構成要素を作り出す時期、つまり、多重人格が発症する前の段階を考察する際には重要な要素の一つに成り得ると考えられるのである。もちろん、

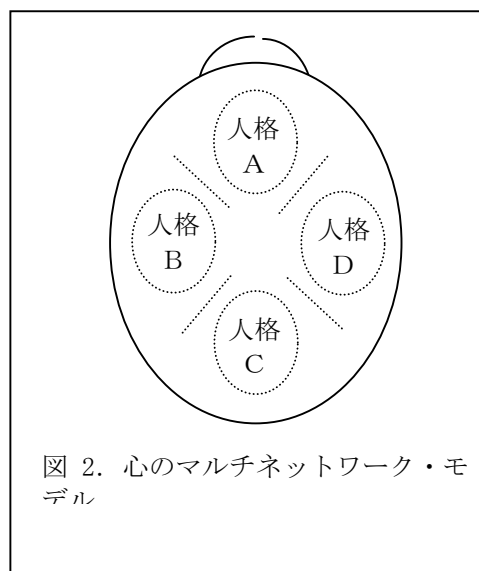


図 2. 心のマルチネットワーク・モデル

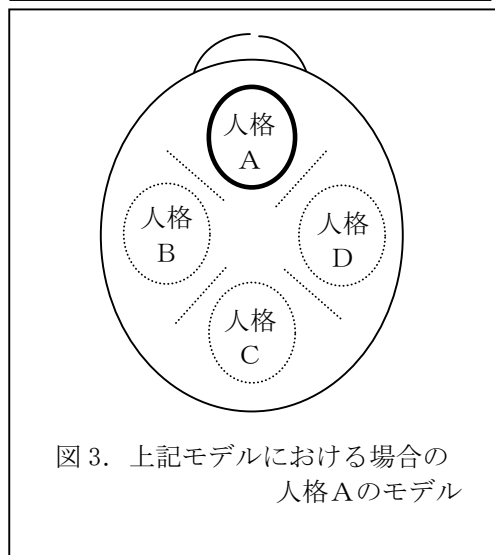


図 3. 上記モデルにおける場合の人格Aのモデル

多重人格になる場合に、必ずスプリッティングが起こるわけではないが、スプリッティングによる対象の分割(怖い親と優しい親とを別々の親であると認識すること)が、そのまま、自分に転化される、つまり、分割した親それぞれに同一化することにより、交代人格を形成する可能性は、十分に考えられるのである。

構成要素の話に戻るが、このように断片化された記憶や感情に加えて、その後に修得していく技能や、その人物が最初から持っていた才能なども人格を形成していく上での構成要素となるのではないかということなのである。

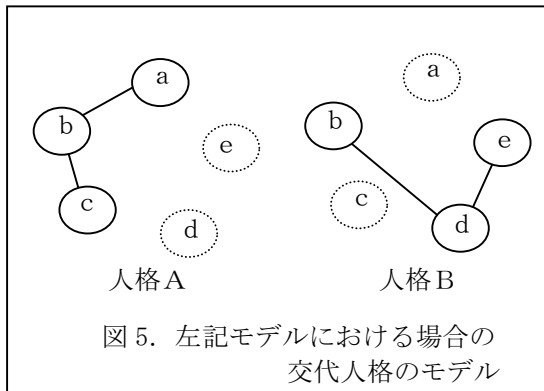
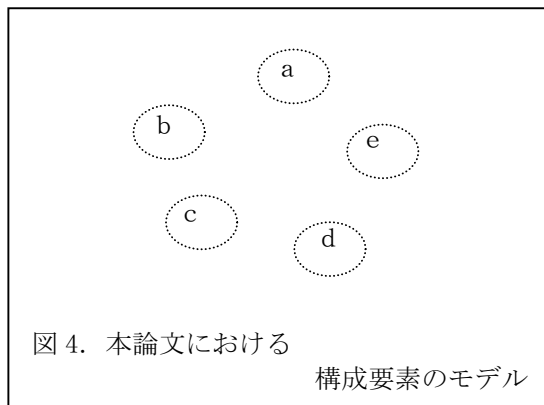
(3) 構成要素を基本とする多重人格のモデル

上記の構成要素を生きてきた中で蓄積された記憶・感情・情報などに置き換え、形成されるのが交代人格ではなく、人格状態(時と場合に応じた性格)で、それらの間に断絶はないと考えれば、このメカニズムは正常な人の心のモデルとしても利用できるのではないだろうか。つまり、仕事では職場で

蓄積されてきた情報や、社会的に作られている社会人のイメージなどから“仕事をする自分”を作り出し、家庭に帰ればくつろげる状況や、過去の自分の経験から“家庭での自分”を作り出すという具合である。

このモデルは、岡野憲一郎が『心のマルチネットワーク』²⁴⁾ (P.42) において論じている“心のマルチ・ネットワーク・モデル”に近い所もあるが、基本的に“心のマルチ・ネットワーク・モデル(図2)”をさらに進化させたものであるといえる。多重人格を例にとると、岡野のモデルではネットワークの構成要素がA B C Dであるとすると、Aが興奮しているときは交代人格A、Bが興奮しているときは交代人格Bという具合に、交代人格単位におけるネットワークの共通の構成要素というものが考慮されていなかった(図3)。これに対して、本論文におけるモデル(図4)では、構成要素がa b c d eとあるとすると、a b cが興奮している場合は交代人格A、b d eが興奮している場合は交代人格Bという具合に、交代人格の単位において、さらに小さい単位である構成要素の組み合わせによるネットワークにより、その特性を得るというモデルになっているため、共通の構成要素についても考慮できるモデル(図5)となっているのである。このモデルにより、岡野の述べる所の関連性のあるネットワーク同士は、同時に興奮するという理論にも、関連性のあるネットワーク同士は、いくつかの共通の構成要素が含まれているために同時に興奮するのではないかと、という無理のない説明を与えることができる。

多重人格の話に戻ろう。本論文のモデルが正しいと仮定すると、交代人格の核となるトリガーの精神的エネルギーが開放(除反応)されれば多重人格の症状は改善されるということになる。そして、実際に除反応作業は多重人格治療の中では重要視されているのである。つまり、除反応できていなかった感情を除反応することで、交代人格を維持していく精神的エネルギーが消えて人格が統合されていき、その際に切り離されていたエネルギーが患者の心全体に戻っていくために、主人格などの抑鬱的な意識状態も消えていき、症状が回復する方向に向かうのである。しかし、多重人格では原因となる事件の記憶が複数の交代人格に断片化されて保存されている場合が多いし、そのバラバラの構成要素がさらに抑圧されている場合もある。このために他の精神疾患よりも除反応作業を行なうのが難しい。多重人格の治療は、断片化された記憶を組み合わせで復元し、除反応作業を行なう。そして、最終的には複数の交代人格を統合し、健康な一つの人格にするのである。治療において、除反応作業と人格の統合は行ったり来たりという感じで行なわれていく、除反応することで新たに人格を統合できるようになり、人格の統合が行なわれることで新しい記憶が出現し、その新



しい記憶を除反応できるようになるというわけである。このようにして順々に人格を統合していき、最後には一つの完全な人格にするのである。

また、人格統合の際に特徴が似かよっている交代人格同士がより統合しやすいという事実があるが、その理由は特徴が似かよっている交代人格を形成している構成要素には共通の要素が多いからではないかと考えられる。これは治療の際に順々に交代人格を統合していき、そして徐々に断片化されていた記憶を復元していくことから理解できる。

(4) 交代人格の記憶における事象と感情の問題

多重人格において、それぞれの交代人格たちは異なった性格・感情・記憶を持っている。それらの記憶は一体どのようにして保存されているのだろうか。交代人格たちは、正常な人と同じように(ときには正常な人よりも鮮明に)自分自身(その交代人格自身)が体験した事象を記憶している。しかし、3.(7)においても触れたように、交代人格の中には、他の交代人格が活動している間も精神的な活動を続けることができ、従って他の交代人格が活動している間の記憶をも保持している交代人格が存在するのである。それでは、そのような交代人格の数だけ記憶を保持しているとしたら、多重人格の人間の記憶容量は、正常な人間の記憶容量よりも多いということなのだろうか。しかし、記憶容量が増加しているという説は少し信じ難いものがある。そこで記憶というものを次のように考えてみることにする。記憶として保存されるものはその事象の客観的な部分だけであり、感情などの主観的な部分は保存されない、

つまり、複数の交代人格が同じ体験をしても記憶として保存される内容は一つであるという考え方である。前述した様に、喜怒哀楽などの感情が発生するのは、感情に関するニューロンが興奮しているからだと考えられている。つまり、同じ体験でも交代人格によって興奮するニューロンの質が異なれば、異なる感情を持つことができ、従って、客観的な事象が一つ保存されているだけで、その事象に対する複数の主観的な感情による解釈が生まれるのではないだろうか。そうすれば複数の交代人格が同じ体験をした場合にも記憶の量は一人分で異なった体験の解釈を保存しておくことができるとは考えられないだろうか。

それでは、どのようにして上記の仕組みを可能にしているのだろうか。人間の記憶はある記憶を思い出すと、同時にその記憶に関連した他の様々な記憶が連想されるように相互に関係しあっている。つまり、あるネットワーク（その記憶を保存するために使用されている構成要素の組み合わせ）が興奮した場合、その項目に関連するネットワークも興奮するというわけである。交代人格も様々な構成要素から形成されたネットワークであると考え、交代人格を形成している構成要素により、感情に関係するニューロンの興奮の質（喜怒哀楽）が変化するのだと考えることはできないだろうか。そうすれば、交代人格毎に同じ事象でも感じ方が異なるのだと説明することができる。

また、上記と同じ原理で無痛覚や無感覚であるような交代人格についての説明も可能になる。つまり、無痛覚・無感覚人格を形成している構成要素では、痛みや苦しみを感ずるためのニューロンを多く興奮させることができない、もしくは痛みや苦しみを抑えるための脳内物質を分泌するときに刺激されるようなニューロンを興奮させやすいのではないかと、いうことである。

(5) 交代人格間の互いの認知

現在までの研究では、交代人格同士の認知に関して、多重人格という症状をいくつかの大きな類型に分けるためには使用しているが、認知の問題自体を深く考察している例はない。しかし、多重人格の新しい解釈のためには、この認知の問題は避けては通れないように感じられるので、ここではこの認知の問題について考察していきたい。

交代人格間の認知の度合は、3. (7) でも触れたが、ここでもう一度、詳しく触れることにする。交代人格は他の交代人格に対して以下のような、3通りの認知の度合を示す。

- 1) 他の交代人格について全く知らない。
- 2) 他の交代人格の存在だけは知っている。
- 3) 他の交代人格が活動している間も覚醒状態であることができる。

(通常、他の交代人格が活動している間は、非活動（休眠）状態であるのが普通)

このうち3)に関しては、さらに次のように細かく分類することができる。

- ① 他の交代人格が行動している様子や外界の様子が分かる。
- ② ①に加えて他の交代人格の大まかな感情が分かる。
- ③ ①②に加えて他の交代人格の思考までが分かる。

複数の交代人格が存在する場合、この認知の度合が様々に組み合わさっている。例えば、他の交代人格を一人も知らない交代人格もいれば、他の交代人格全てを知っている交代人格もいるし、数人の交代人格の存在だけを知っている交代人格もいるのである。1)の状態は基本的に主人格に多い、この状態はそもそもその交代人格が存在していることすら知らないという状態である。そして、全ての交代人格に対して1)の状態である場合は、自分が多重人格であることにさえ気付いていないということである。2)の状態はその交代人格の存在だけは知っているという状態であり、自分の他にその交代人格が同じ身体を使用していることに気付いている状態である。この状態には自然になることもあれば（状況から推測するなど）、医師などに教えられて初めて気付く場合もある。3)の状態は一番特異な状態である。この状態では、自分が活動している間以外に、その交代人格が活動している間も覚醒していることができ、従ってその間の記憶を失うこともない。

エレンベルガーが『無意識の発見・上』²⁵⁾ (P. 156 ~P. 164) において行なった多重人格の分類のうち、交代人格同士の認知に関するものは3つある。

(一) 相互認知性交代性多重人格

: この型の場合、交代人格同士が3)の状態である。つまり、お互いに相手のことを認知しており、望めば相手が活動している間の出来事も記憶することができる。この型は、余り頻繁には発生しない。

(二) 相互忘却性多重人格

: この型の場合、交代人格同士が1)もしくは2)の状態である。しかし、基本的には1)の状態であり、2)の状態にもなり得るということである。この状態の場合、互いに他の交代人格が活動している間の記憶は一切保持していない。

(三) 一方通行的忘却性持続性多重人格

: この型の場合、一方の交代人格（仮に人格A）がもう一方の交代人格（仮に人格B）に対して3)の状態なのである。つまり、人格Aは人格Bが活動している間も望めば活動状態であることができ、従ってその間の記憶を喪失することがないが、逆に人格Bの方は人格Aが活動状態の間は非活動状態となり、その間の記憶は一切なくなるのである。様々な症例の中では、この一方通行的忘却性持続性多重人格が最も多いよう

的に

は人

格Aの方が自由で発揚的であり、人格Bの方は抑鬱的・抑止的・強迫的であるようだ。

上記のように多重人格における交代人格間の“認知”の問題に関しては、基本的には3)の状態に関して分類されているようなので、以降は3)の状態について考察していくことにする。これ以降、単に“知っている”とか“認知”とかいう場合は3)の認知の状態をさすものとする。

また、交代人格が保有する知識の問題として、フランク・W・パトナムは、『多重人格性障害』³⁾の中で次のように述べている。「ある考えや感情に情緒が籠められれば籠められるほど、また心的外傷に結び付けば付くほど、その考えや感情はある交代人格の中に閉じ込められて孤立化され、意識の大きな領域から分離される傾向がある。」「そのために、患者の交代人格は、ある事柄については分離の度合いが強いのに、別の事柄については共通の知識があるといった、非常にまだら状の仕切られ方を示す。」(『多重人格性障害』³⁾ P.160 より引用)

(6) モデルに即して考察する交代人格間の互いの認知

さて、本論文における多重人格のモデルを少し振り返ってみると、心的外傷体験を被ったときに除反応されずに抑圧され意識の正常な部分から解離されたトリガー(喜怒哀楽の感情に係するニューロンを興奮させる記憶で、除反応が正常に行なわれていないために高レベルの精神的エネルギーがそのときそのまま保持されている)が核となり、他の因子(感情・記憶・性格・技能などの断片)を構成要素として形成された人格の基盤が、ある対象(両親・虐待者・TVのキャラクターなど)に同一化してその対象を取り込むことで個性を獲得し、その結果として交代人格が発生するという事であった。ここでは、その中でも構成要素というものについて注目してみたいと考える。どういうことかということ、共通の構成要素を持つ交代人格同士は、初めからお互いのことを認知できる可能性を持っているのではないだろうかということである。

例えば、ある交代人格Aとある交代人格Bが共通の構成要素aを持っているとする。このとき、交代人格Aが活動状態にある場合、その構成要素であるaも興奮している状態であると考えられる。そうすると、共通の構成要素aを持っている交代人格Bも構成要素aが興奮するために活動状態であるのではないだろうかということなのである。これはある記憶が関連性のある他の記憶によって連鎖的に思い出されるのと同じ理論で、ある交代人格が活性化した場合に共通の構成要素を持っている別の交代人格も連鎖的に活性化されるのではないだろうかということである。例の場合ではこの結果、交代人格Aと交代人格Bは互いのことを認知できるはずだというわけである。ただし、交代人格

A・Bともに他にも多数の構成要素を持っているのであるから、一つの構成要素が共通だからといって必ずしもお互いのことを認知できるとは限らない(他の構成要素によって、抑圧されてしまう可能性もある)。これはあくまでお互いのことを認知できる可能性があるというだけのことに過ぎないのである。

また、多数の構成要素から形成されているということから次のような考え方も出てくる。それは共通する構成要素の量、つまり、交代人格同士の関連性の度合によって認知の度合、すなわち、他の交代人格の様子や外界の様子が分かるだけなのか、それとも他の交代人格の感情を知ることもできるのか、さらにその交代人格の思考をも読み取ることができるのか、というレベルが変わってくるのではないだろうかということである。

また、他の交代人格に対する認知能力は、治療過程や自己推理などの後天的な努力によっても手に入れることが可能のようである。このことは他の交代人格について気付いたり、教えられたりすることにより、その交代人格を形成している構成要素に新しい因子(気付いたり、教えられたりした交代人格と共通の構成要素)が加わるためではないか考えることができる。

(7) 交代人格間の抑圧

しかし、交代人格同士が最初からお互いのことを知っている場合はわずかだし、通常は片方だけが一方通行的に知っている場合がほとんどである。また、多数の交代人格が存在する場合、交代人格たちは自分自身のことしか知らない場合も多い。これは一体なぜなのだろうか。どうして、ある2つの交代人格において、片方が優勢になる、というようなことが起こるのだろうか。次はこの問題について考察していきたい。

現在までの症例報告などを調査した結果、交代人格は大きく4種類“抑鬱的・自己否定的な人格”“強大な感情のエネルギーを原動力としている人格”“感情のエネルギーを原動力とする人格に均衡するような人格”“精神的なエネルギーが低く、表面的な活動をしない人格”に分類できるように考えられる。それでは、この4種類の交代人格がどのようにして出来上がるのかを考えてみよう。構成要素の組み合わせや、人格形成の際に4種類の交代人格が発生するのではないかと考えることができるので、それぞれについて以下にまとめてみる。

1. 抑鬱的・自己否定的な人格

: 心的外傷体験を解離・抑圧した結果として誕生すると考えられる。

つまり、ある人格が心的外傷体験を被った後に、心的外傷体験に関する構成要素を排除して、残りの構成要素で再構成された人格であり、新しく人格として発生するというよりは、もともとあった人格が変容した

結果であると考えられる。

: この人格の発生は、正常な人間が嫌なことを忘れようとする防衛機制と同様のメカニズムが病的になったものだと考えることができる。

: 心的外傷体験の記憶と共に、発散されなかった精神的なエネルギーであるトリガーを分離するため、精神的なエネルギーの量が低下して、抑鬱的・自己否定的な人格になってしまうと考えられる。

: 心的外傷体験の記憶を解離・抑圧した結果として発生するため、この人格は、事件に関する記憶や感情などを一切持っていないと考えられる。

: 主に主人格や、自閉的人格になると考えられる。

2. 強大な感情のエネルギーを原動力としている人格

: 上記の“抑鬱的・自己否定的な人格”が誕生する際に、解離・抑圧された記憶や感情を核として、誕生すると考えられる。

: 分離されたトリガーを核として人格形成を行なうという、本論文のモデルに一番近い形で誕生する人格である。

: 心的外傷体験の記憶を核として、構成されているため、その記憶やそれに付随する情動に支配されている。怒りの感情に支配されている人格が虐待者に同一化している場合、典型的な迫害者人格となるだろうし、不安の感情に支配されている人格は、いつも怯えているような子供人格となると予想される。

3. 感情のエネルギーを原動力とする人格に均衡するような人格

: 上記の“強大な感情のエネルギーを原動力としている人格”が誕生した際に、その人格との心的なバランスを取るために誕生したと考えられる。

: 対応する人格とほぼ正反対に働く人格であると考えられる。この人格も分離された心的外傷体験を核としていると思われるが、そのエネルギーを対応する人格と、全く反対のベクトルに向けているのだと考えられる。

: 例えば、不安を核として誕生した、いつも怯えているような子供人格に対抗する（バランスを取る）存在として、天真爛漫な無邪気さを備えた子供人格が誕生すると考えられる。また、怒りや憎しみを核として誕生した迫害者人格に対抗する（バランスを取る）存在として、保護者人格のような存在が誕生すると考えられる。

4. 精神的なエネルギーが低く、表面的な活動をしなない人格

: 何かを核として誕生するわけではなく、全ての構成要素から形成されると考えられる。つまり、上記の3つの人格の誕生に使われなかった要素も含めて、残り全ての構成要素から形成される。ただし、エネルギーを秘めている感情・情動に関する構成要素は除外されていると思われる。このため、感情の起伏のない、活力のない人格になると考えられる。そして、エネルギーがあまりないために、他の人格のように表面的な活動を行なわないのである。

: 全生活史記録人格や、内部の自己救済者などが、この人格にあたると考えられる。表面的な活動は行なわないが、全ての構成要素を含んでいるため、人格内部の心的なシステムの全容を把握している。また、他の交代人格が失っている記憶も含めて、全ての記憶を保持している点が特徴である。

数多くの心的外傷体験を被ってしまったような例では、一つの交代人格が何度も心的外傷体験の解離・抑圧を繰り返すし、再構成を重ねていくため、より自己否定的になっていくと考えられる。また、その解離・抑圧のたびに、解離・抑圧されたものを核とする人格と、その人格に均衡する人格が誕生する。そのために、多くの心的外傷体験を被った例では、交代人格の数が増えるし、主人格もより抑鬱的・自己否定的になるのではないだろうか。図6・図7にこのメカニズムをまとめる。

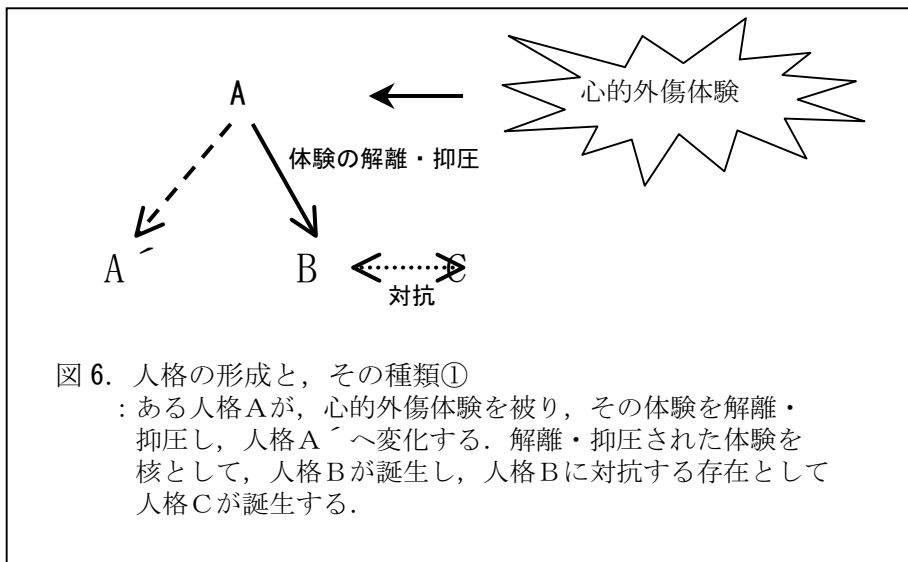


図 6. 人格の形成と、その種類①
 :ある人格Aが、心的外傷体験を被り、その体験を解離・抑圧し、人格A'へ変化する。解離・抑圧された体験を核として、人格Bが誕生し、人格Bに対抗する存在として人格Cが誕生する。

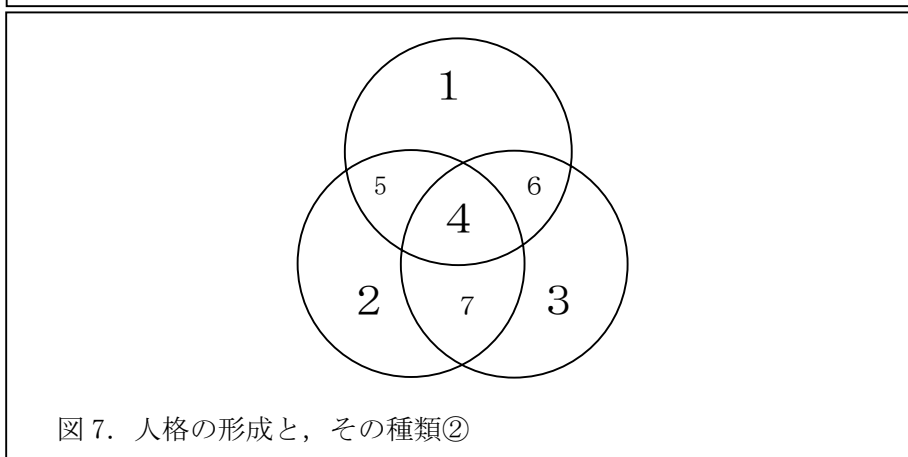


図 7. 人格の形成と、その種類②

図 7 の説明を番号は、それぞれ以下のように対応している。

1. 抑鬱的・自己否定的な人格（主人格など）
2. 強大な感情のエネルギーを原動力としている人格（迫害者人格など）
3. 感情のエネルギーを原動力とする人格に均衡する人格（保護者人格など）
4. 精神的なエネルギーが低く、表面的な活動をしなない人格（記録人格など）
5. 1 と 2 の中間のような人格（自殺者人格など）
6. 1 と 3 の中間のような、もしくは5に均衡する人格（無邪気な子供人格など）
7. 2 と 3 の中間のような人格（精神的に正常に近い人格、模倣者人格など）

交代人格の類型は、以上のようにまとめられると考えられる。

一つの心的外傷では少なくとも二つ以上の人格が形成されるわけだが、全く関連性の無い交代人格も存在すると考えることができる。例えば、図 6 において、ある心的外傷体験で人格 A が A' と B と C になった。この後、別の心的外傷体験で人格 B が B' と D と E になったとすると、A' と D、A' と E の間には直接的な関連性は無いように考えられる（こ

れはかなり簡略化した例である）。このような全く関連性の無い交代人格同士では構成要素がほとんど重ならないため、基本的に、初めからお互いのことを認知する能力は無いように思われる。このため、多数の心的外傷体験が原因となっていて複数の交代人格を持つ複雑な多重人格の例では、お互いのことを知らない交代人格が多く存在するのではないだろうか。

交代人格同士の認知について、図 6 における人格 A' と人格 B を例にとって考えてみる。この場合、人格 A' は、その事件の記憶・感情などと共に人格 B を切り離したことに他ならないので、人格 B のことを初めから認知していることは無いだろう。もし、知ることができるのであれば、切り離す必要など初めからなかったからである。これに対して人格 B の方は、人格 A' のことを、初めから認知できる可能性はあるように考えられる。これは、同じ構成要素を持っているために活性化されるだろうという本論文における前述の理論に加えて、人格 A' から人格 B の方向には、抑圧のメカニズムが働いているとしても逆方向には働いていないだろうと考えられるからである。この理論を本論文において紹介したエレンベルガーの多重人格の分類に照らし合わせると、一方通行的忘却性持続性多重人格の場合に、他

方の人格のことを知っている人格の方がより自由で発揚的である（つまり、精神的なエネルギーが高い）ことの説明も可能である。

また、図7における4.の人格，“精神的なエネルギーが低く、表面的な活動をしない人格”は、他の全ての人格に対して、初めから認知できる可能性があると考えられる。理論的には図6における人格B（以降、単に人格B）が人格A（以降、単に人格A）のことを認知できる場合と同様である。しかし、実際の例から言えば、図7における4.の人格（以降、人格Cとする。図6における人格Cとは異なるので注意していただきたい）が他の人格のことを知る割合の方が、人格Bが人格Aのことを知る割合よりも遥かに多い。ではそれは何故なのだろうか。このことはごく簡単に考えると次のように説明できる。人格Bは、他の交代人格が活動している状況では普通（正常な人が）眠っている状態にある。このことは、他の多くの交代人格に共通していることである。しかし、人格Cは、基本的に他の交代人格のように表面に出て活動すること自体が少ないために、他の交代人格が活動している間も眠らないで、他の交代人格の潜在意識的に精神的な活動することができる（身体を直接使用しなくても、意志することで、他の交代人格に影響を与えることができる）場合が多いのである。このために、他の交代人格が活動しているときも、起きたままでいられるので、人格Bよりも他の交代人格のことを認知できる割合が多いのだと考えることができる。

それではどうして、人格Cは、他の交代人格が活動している間も休眠状態にならずにすむのだろうか。交代人格が自分の活動していないときに眠ったような状態になる理由の一つとして、活動すること自体に相当のエネルギーが必要であり、エネルギーが枯渇しすぎると眠りにつくというものがある（このために治療の場においては、怒れる交代人格などに好きなだけ大声を出させるなどしてエネルギーを発散させて、引っ込ませるという方法も取られている）。このときに他の交代人格を表に出すこともある。ただ、この行程は意識的に行なっていないことの方が多く（通常、正常人が眠くなったから眠るという場合と同様である）、他の交代人格の存在には気付かない場合の方が多い。そして、エネルギーが戻るとまた活動を始めるのである（通常、正常な人と同様に“目が覚めた”と感ずることが多い）。これに対して、人格Cは、普段表に出て活動していないためにエネルギーを消費しておらず、従って他の交代人格が活動している間も起きていられるだけのエネルギーを保持していると考えられる。

では次に、どうして人格Cは、基本的に他の交代人格のように表に出て活動しないかを考えてみよう。これは、人格Cの仕組みをもう一度良く考えてみれば比較的簡単に理解できる。人格Cは、人格Aや人格Bが誕生する際にも締め出されてしまい抑圧されてしまった構成要素も含めて、全てに近い構成要素

から形成されている。つまり、人格Aや人格Bにとって、抑圧しておきたい構成要素も多く含んでいるのである。しかも、人格Cよりも、人格Aや人格Bのような交代人格の方が圧倒的に数が多いはずである。従って、普段はそれらの交代人格たちによる無意識の抑圧により、人格Cは他の交代人格のように自由に表面的な活動をすることができないのだと考えることができる。それでも、他の交代人格と同程度のエネルギーは持っているはずなので、他の交代人格たちが活動している間も、他の交代人格の潜在意識的な状態で活動できるのではないのだろうか。そして、表に出て実際に身体を使用して活動できるようになるのは他の交代人格が全て消耗しきっているときや、何らかの特別な状況（治療過程や、他の心的外傷体験による影響など）によって他の交代人格よりも遥かに高いレベルのエネルギーを得てしまったときなどに限られると考えられる。

（8）具体例との検証

ではここで本論文におけるメカニズムについて、モートン・プリンスの『失われた私を求めて 症例ミス・ビーチャムの多重人格』⁷⁾に照らし合わせて考察していくことにする。

ビーチャムには以下のような3つの交代人格が発見された。

「B I」1893年の春に治療を求めて最初にやって来た人格。

抑鬱的・自己否定的で被暗示性が強い。

他の人格については全く知らず、他の人格状態時の記憶も全くない。

慎み・苦悩・憂鬱・従順な理想化傾向がみられる。

自分本位・短気・粗野・無慈悲・真実を語れない（真実の半分を抑える）ことなどは罪悪であり、邪悪であると感じる。

「B III」自らを“サリー”と名乗る人格。

悪戯好きで苦しみや痛みを全く感じない。

他の人格の存在を全て知っているし、他の人格状態時の記憶も全て保持している。

B IVについては大まかな感情しか理解できないが、B Iについてはその思考をも読み取ることができる。

「B IV」1899年6月に出現した人格で、正常人に最も近い人格。

1893年の病院での出来事以前の出来事についての記憶と、1899年6月以降、自分が表に出ているときの記憶を持っている。

他の人格については全く知らず、他の人格状態時の記憶も全くない。短気・不機嫌・強情・信仰心の無さ・自己中心的・野心・私欲・無口な反抗心等がみられる。B Iよりも壮健で、病気にもならず心身面での努力をなしうる。

それでは、これらの交代人格たちはどのようにし

(9) 交代人格たちが保有する才能・技術について

多重人格における交代人格たちが稀に持っている正常な人間以上の技術や技能について、人格の統合後はどうなるのかということについて考えてみよう。

多重人格の人間は、様々な技能や能力に特化された専門人格を持っていることがある。これらの専門人格たちはある特定の事柄については超人的な働きをする交代人格である。

前述したダニエル・キイスの『24 人のビリー・ミリガン』⁷⁾のウィリアム・スタンリー・ミリガンの例(本論文表 1. 参照)では、交代人格たちのそれぞれが、生物学・物理学・化学・銃と弾薬の知識・空手・交渉術・電気工学・楽器・絵画・外国語など、多種多様な技能に特化していて、一般人では及びもつかないくらいの習熟度を誇っていた。中には体内のアドレナリンの分泌を自由自在にコントロールすることで途方もない力を発揮するという特殊能力を持つ交代人格までが存在した。

ここで、それならば多重人格の人間が治療の末に完全に統合がうまくいけば、様々な技能を高水準で保有した超人的な人間が生まれるのではないか、という意見が出てくると思う。しかし、実際にはそのようなことは起こらない。実際にはうまく統合が行われた場合、それぞれの交代人格たちが保有していた技能や能力は消滅することこそないものの、交代人格たちが保有していたときよりも遥かにその精度や熟練具合が減衰してしまい、各交代人格たちが保有していた技能や能力の総合には遠く及ばなくなってしまうのである。それでは、このようなことがどうして起こるのかを考えてみよう。

交代人格は、トリガーを核として様々な構成要素が結び付くことにより、ある種ネットワーク的に形成されているという考察に我々は至った。では統合が行われた場合にどのようなことが起こるのかという簡単なモデルを考えてみよう。

ここで仮に交代人格AとBを定める。交代人格Aは物理学が得意で、交代人格Bは空手が得意であることにして、人格A、人格Bの構成要素をそれぞれ簡略的にa b, a cとする。構成要素bとcがそれぞれ物理学・空手に関する因子であるとすると、構成要素aは体内にある未分化のエネルギーを行動力・判断力・思考力等に変換するような因子(または、ごく単純にエネルギーを生産し、他の構成要素に送り出す因子)ではないだろうかと考えることができる。そして、人格Aと人格Bを統合して人格Cとした場合に構成要素は、a a b cではなく、a b cとなるはずである(公約数的な構成要素であるaは二つの人格において共通であるために、統合されたときに2 aとはならないはずである)。つまり、構成要素b・cにはそれまで送られてきていたaという量のエネルギーが、a/2という量となる(正確に半分であるとは言えないが)ために、人格Aと人格Bであったときよりも人格Cとなったときの方

まずビーチャムが七歳のとき、生後四日の弟が死亡したときに“サリー”が発生した。この人格は、前述の人格B(強大な感情のエネルギーを原動力としている人格)と同様に誕生したものと考えられることができる。そして、もともとのビーチャムは、“ビーチャム”とでもいうべき存在、想像力が豊かであり被暗示性が強く、幻覚や白昼夢のようなものをよく見てしまうような人物に変化したと考えられる。

しかし、“サリー”は“ビーチャム”の行動に様々な影響を与えることができたものの、実際には身体を自由に使用することはできなかった。だが、サリーはビーチャムがやっていること・考えていることは全て分かったし、ビーチャムが眠っているときにも起きていることができたという。このために、ビーチャムが知らないようなことや、忘れてしまったようなことも覚えているというのである。これはつまり、人格Bと同様の経緯で誕生したサリーは、その後、人格C(精神的なエネルギーが低く、表面的な活動をしない人格)と同様に発展していったと考えられる。ただ、発生経緯が人格Bと同様なため、その精神的エネルギーは高く、ビーチャムに対して影響を与えることができたのだと思われる。

次にビーチャムが二十歳のとき(1893年)の病院での出来事で、ビーチャムは“B I”と“B IV”に分裂した。この場合は、B Iが前述の人格A、B IVが人格Bに対応すると思われる。しかし、このときも発生した当初のB IVは眠ったような状態(サリーと異なるのは完全に他の要因からシャットアウトされていたことであろう)にあり、表に出てくることはなかった(B IVはこのときに発生したが、発現したのはそれから6年後の1899年のことである)。

大まかに分類すると、B Iが人格A、B IVが人格B、サリーが人格Cに対応しているといえるだろう。それではここで、それぞれの認識程度について考えてみよう。B IもB IVも他の人格については全く知らず、他の人格が活動している間の記憶も全くない。他の人格の存在を知った後も、他の人格が活動している間の記憶は一切ない。これに対してサリーは、B Iのことを初めから知っていたし、B IVのこともB IVが発現して(表に出て)からは知っていた。B I・B IVが表に出ているときもその行動を(B Iに関しては思考さえも)知ることができ、そのため他の人格が表に出ている間の記憶も全て持っていた。これはB I・B IVの側にはそれぞれに何か抑圧しておきたい事象があるのに対して、サリーの側にはそのような事象が存在しないからだと考えられることができる。

このように具体例に即して考えても、この理論で説明すれば割と簡単に理解できるのである。

が物理学と空手の能力は低くなると考えることができるのである。

このことを正常な人間で考えてみると、何か一つの作業を集中して行なっている場合の方が、複数の作業を並行して行っている場合よりも遥かに効率良くうまく行なうことができるという事柄と近いように感じられる。すなわち、交代人格における技能・能力の特化は、この事柄の拡大版であると考えられることもできるわけである。交代人格として分化しているときには、その技能・能力に対する経路だけを独立して存在させることができるために、その技能・能力に集中することが可能となり、そこだけに全ての力を費やすことができる。しかし、人格の統合が行なわれると今まで解離されていた部分にも影響を与えることができるようになる反面、ある特定の経路だけを独立して存在させることができなくなってしまうために集中ができなくなり、結果として人格が分化していたときよりもそれぞれの能力が劣ってしまうことになるのではないだろうか。

また、ある作業を集中して行なうということは、正常な解離の適応機能の一つである“仕事の能率向上と経済化”である。多重人格も解離のメカニズムが用いられている以上、共通点が見出せることは不思議なことではないのである。

(10) 解離における心の区画化

それでは多重人格だけでなく、シャーマニズムや宗教的神秘体験についても考察しながら、解離の概念をさらに深く考察していきたいと思う。

人間の心の重要な特徴として“意識の並列性”が挙げられる。これは同時に複数の作業を行なえるための能力である。例えば、自動車を運転しながら、音楽を聞いたり、友人と会話をしたり、というようにである。このような“意識の並列性”を可能にしているのが、正常な解離のメカニズムなのである。解離の定義は“正常状態ではなされていない、知識と体験との統合と連絡とが成立していないことを1つの条件とする概念”であるとしたが、これは病的な解離の定義である。2. (1) でも述べたように解離には“不適応を一切引き起こさない正常な解離”が存在するのである。それでは、正常な解離のメカニズムとは一体どんなものなのであろうか。

ここでもう一度、正常な解離過程による適応機能について触れておこうと思う。正常な解離過程による適応機能は、前述したように以下の通りである。

【ある種の行動の自動化】

：呼吸をしたり、歩いたりといった行為。このようなことは、負傷したときくらいしか意識しない。

【仕事の能率向上と経済化】

：パソコンのブラインドタッチや、黙々と続けられる流れ作業など。

【和解できない葛藤の溶解】

：“嫌な事は忘れる”などの行為。

【現実の拘束からの逃避】

：映画・読書・ゲーム・TVなど、集中して時間が経つのも忘れるような体験がこれにあたる。

【破局体験の切り離し】

：交通事故のときの軽い記憶喪失などの体験がこれにあたる。

【ある種の感情のカタルシスの排泄】

：泣いたり、笑ったり、感情を行動によって放出する行為。

【群れ感覚の増強】

：宗教・ブランド志向など、個人の自我をグループのアイデンティティや、個人を超えた被暗示性の中に埋没させる行為。

さて、これらの機能を可能にしている解離過程の本質とは一体何なのだろうか。それは、心の区画化ではないだろうか。心というものは、初めは何の区別もない一つのものであると考えられる。このことは、生まれてまもない子供が、色々な行動を行なうとき、それぞれの行動における意識の状態が直列的に繋がっているように見えることから理解できる。例えば、今まで泣いていた子供に玩具を与えると、今まで泣いていたことを忘れて玩具に夢中になる。このことは、心がなんの区画化もされていない一つの状態であるために、異なる行動状態に移行する場合、意識の全ての部分が異なる状態へと変更されるからであると考えられる。しかし、このように異なる行動状態に移行するたびに意識の全てを変更していたのでは手間がかかりすぎるし、非効率的であるといえる。そこで成長の過程で、様々な経験をしたり、学習をしたりすることによって、効率良く作業したり、生活したりするために心は区画化されていくのではないだろうか。心が区画化されることにより、ある行動状態のときは心のある部分、他の行動状態のときは心の他の部分という具合に役割を分担することにより、異なる行動状態間の移行をスムーズに行なえるようになると考えられる。また、この心の区画化により、直列的ではなく並列的な処理を行なっていけるのだと考えることができる。

この区画化は正常な状態の場合、区画化されたそれぞれの部分が連絡可能であり、自ら統御可能である。この区画化された部分の連絡が断絶している状態が、病的な解離の状態であるといえる。忘れるという行為は、心の区画化のための壁が強固になった場合に起こると考えられるが、病的な解離の状態においては、この壁が強固になる状態が通常の状態よりも激しく、また通常ならば健忘を起こさないような事象にまで起こるのではないだろうか。つまり、正常な状態ならば情報が行き来できるように穴のようなものが開いているとして、それが塞がってしまった状態が病的な解離ということになるだろう。また、この情報が行き来できるような穴は、使用すれば使用するほど大きくなるのではないだろうか。例

例えば、漢字などを覚えるときに何度も繰り返し繰り返し書くことで、初めはすぐには出てこなかった漢字が、徐々にすぐに関くようになるというようにである。逆にあまり使われない区画への壁は、徐々に情報の行き来ができにくくなり、忘れられてしまうのではないだろうか。ただ、この区画化の壁が強固になる（忘れてしまう）現象は、その区画が担当するものが他のものと結び付いていればいるほど起こりにくいと考えられる。例えば、自転車にのることや、スキーを滑ること、泳ぐことなどはしばらくやっけていなくても、そうそう忘れることはない。これはこの区画が“身体を動かす”という言ってみれば大きな区画と結び付いているからだと考えることができる。また何かを暗記する場合でも語呂合わせや、他の何かとセットにして覚えると忘れにくいということからも、この理論は妥当であるといえる。

また、区画化された心には、覚醒度のレベルが存在すると考えられる。そのレベルには大きく分けて次の3つがあるように思われる。

< 1 > 意識に上っている状態。

: ある瞬間に意識を占めているようなレベル。例えば、読書をする、ゲームをするなど。フロイトの言うところの“意識”。

< 2 > 意識には昇っていないが、その行動を行なえる状態。

: 意識を集中させてはいないが働いているレベル。例えば、自動車の運転中に友人と会話をするという例では、“会話をする”という行為は< 1 >のレベル、“運転する”という行為は< 2 >のレベルであるといえる。フロイトの言うところの“前意識”。

< 3 > 意識に昇っていない状態。

: 他の区画が意識に昇っている間は、忘れられているのと同様の状態であるレベル。例えば部屋でくつろいでいるときは、仕事関係のことは頭から外れているというような状態。フロイトの言うところの“無意識”。

通常、この覚醒度の変動は簡単に行なうことができると考えられる。そして、なかなか覚醒度が< 2 >以上の状態に上がらない場合、それを“忘れていない”状態であるとするができる。また、ある区画を< 1 >の状態に上げて、残る他の区画を< 3 >の状態に下げた場合、< 1 >のレベルに上げた行動に集中しているということができる。こうした場合、自分の能力はその行動だけに使われるので仕事の能率が上がるという訳である。また、深く考えなくても作業ができるようになる場合、つまり、< 2 >の状態でも延々と作業を続けることができるようになる場合もある。これが正常な解離過程の適応機能の一つである“仕事の能率向上と経済化”であると考えられる。また、歩くという行為や、自転車に乗るといった行為は、通常は< 2 >のレベルだけで行動して

いると思われる。これは正常な解離過程の適応機能の一つである“ある種の行動の自動化”であると考えられる。このような行為が< 1 >のレベルに上昇するのは、何か特殊な状況が起こった場合である。例えば、足をケガしているとか、道が危険であるといった場合である。

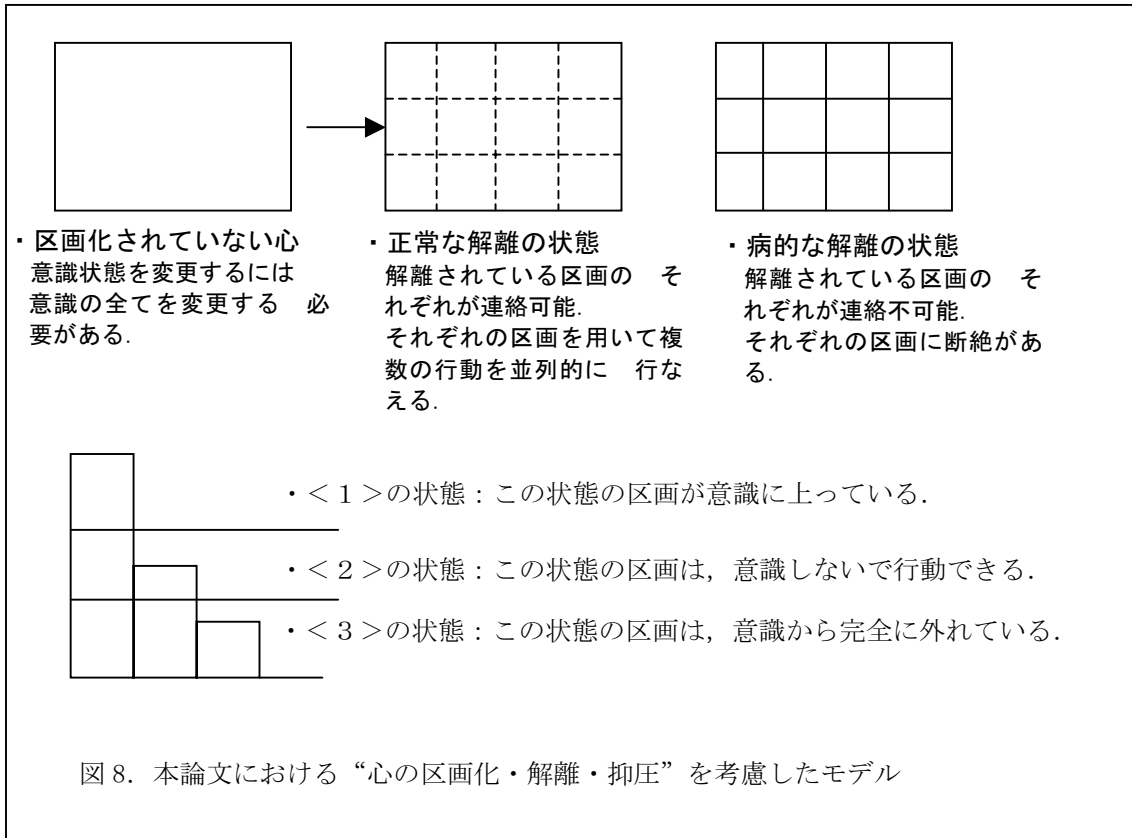
また、どうしてもレベルが< 3 >から上がらない場合がある。これはフロイトの言うところの抑圧であると考えられる。つまり、その区画が心的外傷体験の記憶である場合、それが意識に上がると精神的に良くないと判断され、ずっと< 3 >のレベルに留められているのである。またこの場合、他の区画からもシャットアウトされている場合が多く、区画化するための壁も強固である場合が多く、病的な解離の状態であることが多い。つまり、抑圧と病的な解離は同時に発生することが多いと考えることができる。

さて、この理論と前述した多重人格に関するモデルを合わせて考えてみよう。前述のモデルにおける構成要素と対応するものは、意識の区画化された部分であると言える。そして、核となるトリガーは、< 3 >の状態に留められている記憶であると言える。人格形成のメカニズムは、区画化されたいくつかの構成要素と核となるトリガーの組み合わせであると考えられる。病的な解離により区画化されたものでも、病的な解離で区画化されたもの同士の中では強固な壁で阻まれていない部分があると考えられ、その結び付きのある病的な区画と、病的でない正常な区画の組み合わせにより、交代人格が形成されているのではないだろうか。おそらく病的でも正常でも人格や性格の形成の基礎となる構成要素は、少なくともレベルが< 2 >以下の区画であり、通常は意識に上がらない部分であると考えられる。これは、自分自身のことが一番良く分からないという我々がよく感じるあの感情からも理解できるだろう。

ではこのモデルを使い、シャーマニズムや宗教的神秘体験について考察してみよう。

まずは、シャーマニズムについてである。病的な憑依においては、基本的には多重人格における交代人格と同様に説明できると思われる。ただ、病的な憑依においては自分が自分である（この身体の主である）という構成要素が抜けているために、外から侵入し肉体を操っているというように感じているのだと考えられる。シャーマンの場合は、心的区画の覚醒度の増減を正常人よりも上手くコントロールできるのだと考えられる。つまり、ある区画だけを< 1 >の覚醒度に特化することで、特殊な意識状態に入ることができるのである。言い換えれば、集中のレベルが並外れて高いとも言えるだろう。また、区画化の能力も高いために、自らの意志で憑依状態に入り自分を他の存在に変換し、そして、その後にもまた自分自身に問題なく帰って来られるのだと考えられる。

次に、宗教的神秘体験についてである。これはあ



る区画が< 1 >のレベルにとっても高く特化されたために、極度の集中状態において起こると考えることができる。そして、この体験が後になって鮮明に思い出せないのは、極度の集中状態で遥かに高いレベルまで上昇したことにより、その反動で今度は少なくとも< 2 >以下のレベルまで下がってしまい、それを意識上げることが難しくなっているからだと考えられる。しかし、その経路は開いているので、今一度同じ体験をしたときには、その体験であると理解できるのだろう。

以下に、意識の区画化・解離・抑圧を考慮したモデルを図8にまとめる。

8. 結論

さて、ここであらためて本論文のモデルの基本である多重人格と、その他の現象、シャーマニズム、宗教的神秘体験、そして、解離の概念と共にそれらをまとめる指標となりうるヒステリーについて、その共通項、差異についてまとめていきたいと思う。

まず、その発生原因についてである。一般的に多重人格は、幼・小児期に受けた心的外傷体験が主な発生原因であるとされている。心的外傷体験を被った場合に、誰もが普通に持っている解離能力が強化され、心的外傷体験の記憶や感情を意識の全体から切り離すのである。その解離された部分が同一化によって個性を獲得し、交代人格となる。

シャーマンにおいては、自分の意志ではなく自然

にシャーマン化する召命型では、召命を受ける者は、精神的・肉体的困難（病気や、家庭の不和など）に悩まされているか、思春期などの人生における年齢的に重大な時期にいる者である。病的な憑依の発生原因も同様である。また、自分の意志でシャーマン化の道を進む探求型では、その過程は、民俗・社会・文化を越えて類似している。即ち、師匠につき、タブーを守り、呪文や儀礼を習得する。その後、トランス状態に入ってイニシエーション的洗礼を受けシャーマン化するという過程である。これらの修業は熾烈を極めるため、召命型においてその契機となる精神的・肉体的困難を人工的に作り出すことになり、その結果としてシャーマンとしての能力が身に付く。

宗教的神秘体験は、その人の人生における重大な個人的精神の危機が主な原因である。シャーマンと同様に祈りや修業を重ねることにより、自分自身を意識の神秘的状態である恍惚状態に導く場合もある。祈りや修業による場合でも、心身的に極度の疲労状態で神秘的体験を経験する機会が多い。

ヒステリーは、極端な心理的負荷が主な発生原因である。通常なら何かを体験したときには、その場で感情や情動が発散される。しかし、心的外傷体験において感情や情動の発散がうまく行なわれなかった場合、精神的・心理的なエネルギーがそのままの状態に残ってしまう。そして、その発散されないまま残っている心理的エネルギーがヒステリー症状の核となるのである。つまり、ヒステリーの本質は、過剰なエネルギー負荷を心的な全体から孤立した一

）に閉じ込めることなのである。この働きは、心的外傷体験の記憶や情動を複数の交代人格の中に分割して封印する多重人格の場合と共通の働きであると考えられるだろう。

また、多重人格や憑依、ヒステリーなどを引き起こした原因は、なかなか明らかにはならないという共通項がある。理由としては、本人がその体験自体を解離しているために記憶していなかったり、原因となった出来事と病的な現象との因果関係について気付いていなかったりするためである。

このように上記の各現象の発生原因は全て、それが自分の意志と関係なく発生するにせよ、自分の意志で望んで引き起こすにせよ、心もしくは身体が極限の状態に追い詰められることに、その中核を置いているといえる。しかし、精神的・肉体的困難に見舞われた者全てが、多重人格・憑依現象・ヒステリーを引き起こしたり、シャーマン化したり、神秘的な体験を経験したりするわけではない。そこには性格や、社会・文化的な周囲の環境など、個人的な資質が深く関係していると考えられる。

次に各現象が呈する特殊な意識状態についてである。多重人格における特殊な意識状態は、それぞれの異なる交代人格への人格変換である。これにより、多重人格者は複数の意識状態を全く違う人格として使用することができる。シャーマンにおける憑依や病的な憑依現象における人格変換も、見た目は多重人格における他の交代人格への人格変換とほとんど同じである。異なる部分は、人格本人の肉体に関する解釈の違いである。多重人格の場合、肉体は自分自身のものであり、その身体を持ち主は自分であるという意識がある。しかし、憑依の場合、憑いている存在は外部から侵入してきたという設定であるため、肉体は他人のものであり、その身体は自分のものではないという意識があるのである。

また、シャーマンが憑依状態で行なう予言の類は、宗教的神秘体験における舌語りや、自動書記とよく似ている。宗教的性格の中心は“分裂した心”であるとも言われており、宗教的神秘体験における意識の恍惚状態も、普段とは異なる意識状態へと変換するという点では、多重人格や憑依現象における人格変換と同様の現象であるといえるだろう。また、ヒステリーにおいてフラッシュバックによる幻覚を見ている状態なども、普段の意識状態から病的な意識状態への変換という点で同様の現象であるといえる。

このように各現象において、それぞれの特殊な意識状態に特徴はあるものの、基本的には普段のある状態から、別の異常な状態へと意識が変換することを中核においているといえるだろう。つまり、どの現象においても、いくつかの別々に分割された意識状態を持っていて、状況に応じて、それらの意識状態に入り込んでいるといえる。

次に特殊な意識状態から、通常の意識状態に戻つ

た場合の記憶の有無についてである。多重人格の場合は、基本的に他の交代人格が活動している間の記憶は保持していない。例外的に同時性多重人格と呼ばれるような症状の場合、他の交代人格が活動している間も、意識を活動したまましておくことができ、従ってその間の記憶を保持している交代人格も存在する。シャーマンにおける憑依型、病的な憑依に関しては、多重人格における場合と同様に基本的には記憶を保持していない。しかし、多重人格の場合と同様に例外的に憑依中の記憶を保持している場合もある。また、脱魂型のシャーマンにおいては、脱魂状態で体験した他界への旅行体験について、他人に語るという職業性格上、基本的にトランス状態の間の記憶を保持している。

宗教的な神秘体験においては、その体験のことを後から思い出そうとしても、鮮明には思い出せない。しかし、完全に忘却しているというわけではなく、その体験に関する記憶がいくらかは残っているのである。そして、その体験から受ける重要さの感じは、とても大きいものであり、その後の人生に大きな影響を与えるほどなのである。ヒステリーにおける幻覚発作などの場合も、発作後は、意識が朦朧としており、その体験のことを鮮明に述べることはできないようである。

このように各現象において、特殊な意識状態での記憶は基本的には完全に保持されていないか、ほとんど保持されていないようである。全く覚えていない場合と、少しは覚えている場合というような差が生まれるのは、一般にも忘れやすい事象と、忘れにくい事象があるということと同様のことでありと考える。

最後に、各現象におけるその他の共通項と差異についてまとめてみたい。

シャーマンは、他の現象と違い病的ではないとされている。その理由は以下のとおりである。

- ・自分の意志で、脱魂や憑依などの異常心理状態に入ることができる。
- ・自分の意志で、脱魂屋憑依などの異常心理状態から通常の心理状態に戻ることができる。
- ・以上の能力を自分の意志で、制御・利用するために社会的な生活の障害とならない。
- ・以上の能力を社会の個人・団体のために有益に利用することができる。

シャーマンがその役割類型(4。(4)参照)を1人のシャーマンで、こなしている場合もあれば、複数のシャーマンで分業している場合もある。この事実は、多重人格における交代人格の類型(3-3.参照)について、1つの人格が1つの特性だけを有している場合もあれば、1つの人格が同時に複数の特性を有している場合もあるという例と類似している。

宗教的神秘体験における“意識の神秘的状態”というものは、意識の知的な状態であるというよりも、むしろ感情や情動の状態に似ているといえる。この

事実は、多重人格における交代人格間の脳波の違いが、全く別人物の脳波の違いというよりも同一人物の感情や情動の変化による脳波の違いに近いという事実と類似している。

宗教的神秘体験における“異言”は、シャーマンにおける“秘密の言語”に不明瞭で意味が分からないなどという共通点が見出せる。ただし、シャーマンの“秘密の言語”は一般人には理解できないが、シャーマンにとっては意味のある理解できる言語である。

宗教的神秘体験の類型は、人間の宗教的文化に携わってきたという特徴から、シャーマニズムと類似する点が数多くある。例えば、異言や自動書記、荘厳な風景の幻覚などを見ることである。そして、神や聖霊との合一体験のときの神や聖霊になりきっている意識状態は、シャーマンの憑依状態や多重人格における交代人格と同様の状態である。

ヒステリーにおける“器質的な原因に由来しない身体的障害”、多重人における“身体障害者人格”、シャーマニズムや宗教的神秘体験における“痛みや熱さを感じない状態”などは、これらの身体的障害・状態が心因性のものであるという共通点を持っている。また、これと関連する項目に、ヒステリーにおける“無痛覚・無感覚”、多重人格における“無痛覚・無感覚人格”、シャーマンや宗教神秘家における“修業の一環として焼いた石の上を裸足で歩く(熱さは感じていない)”などが見られる。これらの現象は、精神的なものが身体に作用を現わす例として重要な意味を持っているといえる。

ヒステリーの症状の中で、多く見られるものに頭痛があるが、多重人格においても、抑鬱的で精神的に弱っている主人格などは、頭痛に悩んでいる場合が多い。

ヒステリーにおける幻臭・幻視・幻聴などの現象は、多重人格・シャーマニズム・宗教的神秘体験においても頻繁に起こる現象である。例えば、多重人格者は、鏡の中に実際とは違う自分の姿を見るし、シャーマンは、精霊などの霊的存在の姿を見ることができる。そして、宗教的神秘体験の体験者は、この世のものとは思えない荘厳な風景を見るのである。

ヒステリー患者が転換症状において体験する苦痛は、オルガスムの満足と等価であり、転換の場所である身体部分、性的器官と同様の価値を取るといふ論理がある。この論理は、ヒステリー患者が苦痛を訴えている部分を刺激すると恍惚とした表情をすることからその妥当性を理解できる。また、宗教的神秘体験において神秘化を感じる恍惚感とも共通性があると考えることができる。

以上のように、本論文では多重人格・シャーマニズム・宗教的神秘体験について、その共通性と差異とを見出し、“解離”という一つ概念を用いて考察を重ねてきたわけであるが、そこから見えてきた人間の心についての疑問に対する答えは、“心の区

画化”と“心的区画の覚醒度のコントロール”の能力であると言える。

これはどういう事かということ、多重人格にせよ、シャーマニズムにせよ、宗教的神秘体験にせよ、その本質は心の区画化あると考えられるからである。多重人格は、心的区画がそれぞれ個性を獲得し、独立した同一性を持つことで成立する。シャーマンは、心的区画の中から自分の意志で使用する区画を決め(通常の間では選択できないような区画でも選択できる)、その心的区画の覚醒度を上手くコントロールすることで、特殊な意識状態に入り、その能力を振るう。宗教的神秘体験に関しては、ふとしたきっかけにより、心の一区画の覚醒度が普段よりも数段上のレベルまで上昇する。通常体験することのないその体験は、経験者の心に後々まで影響を残す。また、ヒステリーに関しては、心的な負荷により他と強固に隔たれた区画が他の身体的な区画と結びつくことで、心因性の身体症状を呈するのである。

本論文では、上記のように多くの現象を無理なく説明できる“心の区画化・解離・抑圧を考慮した構成要素による心的世界の構造モデル”を作成した。

このモデルは、最初に多重人格における交代人格の形成のモデルを作成し、そのモデルを基礎としたものである(本論文7.(3)参照)。基礎となるモデルは、感情・記憶の断片、技術、才能などの様々な構成要素がネットワーク状に組み合わせられて人格が形成されているとするものである。人格を構成する要素は、人格同士で共通のものもあり、それによって交代人格同士の認知や記憶の問題も説明できる(本論文7.(4)～7.(9)参照)。そして、そのモデルを心理現象全般に適用できるようにしたものが、本論文の最終的なモデルなのである(本論文7.(10)参照)。

つまり、心が生み出す多種多様な意識状態(多重人格においては交代人格)は、心的区画(上記モデルにおける構成要素)がネットワーク状に組み合わせられたものであり、そのネットワークに含まれている心的区画と、それぞれの心的区画の覚醒度によって多種多様性を得ているというモデルである。このモデルは、心的区画の区画化の強固さや、心的区画のネットワークの相互連絡性や、ネットワークの可逆性などを念頭に置くことで、異常な心理だけでなく、正常な心の仕組みを説明するためのモデルとしても使用できる。つまり、本論文のモデルを使用することで、今まで別個の現象として取り扱われてきた、多重人格・シャーマニズム・宗教的神秘体験などを同じメカニズムを持つ心理的現象として考察できるだけでなく、それら異常な心理状態と正常な心理状態との関連性や連続性についても考察できるのである。また、序論でも述べたように、本論文を読んだ人間が、モデル化された心の仕組み

を知ること自分自身の心について深く考えること
の手助けにもなると考えるものである。

参考文献

- 1) 『イマーゴ 1993 vol. 4 - 3・特集＜多重人格＞』 [青士社 1993]
- 2) フランク・W・パトナム『解離 —若年期における病理と治療—』 (中井久夫 訳) [みすず書房 2001]
- 3) フランク・W・パトナム『多重人格性障害 —その診断と治療—』 (安克昌・中井久夫 訳) [岩崎学術出版社 2000]
- 4) アメリカ精神医学会『DSM - IV 精神疾患の分類と診断の手引』 (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 訳) [医学書院 1995]
- 5) カール・ヤスパース『精神病理学原論』 (西丸四方 訳) [みすず書房 1971]
- 6) 高橋紳吾『きつねつきの科学』 [講談社 1993]
- 7) モートン・プリンス『失われた＜私＞を求めて —症例ミス・ビーチャムの多重人格—』 (児玉憲典 訳) [学樹書院 1994]
- 8) 和田秀樹『多重人格』 [講談社現代新書 1998]
- 9) ダニエル・キイス『24 人のビリー・ミリガン (上), (下)』 (堀内静子 訳) [早川書房 1992]
- 10) フランク・W・パトナム他『多重人格障害』 (笠原敏雄 編) [春秋社 1999]
- 11) クリス・C・サイズモア, エレン・ピティロ『私はイヴ —ある多重人格者の自伝—』 (田中一江 訳) [ハヤカワ文庫 1995]
- 12) 佐々木宏幹『憑霊とシャーマン』 [東京大学出版会 1983]
- 13) ミルチャ・エリアーデ『著作集 第十三巻 宗教学と芸術』 (中村恭子 編訳) [せりか書房 1975]
- 14) ミルチャ・エリアーデ『シャーマニズム』 (堀一郎 訳) [冬樹社 1985]
- 15) ウィリアム・ジェイムズ『宗教的経験の諸相 (上), (下)』 (榊田啓三郎 訳) [岩波書店 1969, 1970]
- 16) 吉本隆明『共同幻想論』 [角川文庫 1982]
- 17) 濱田明, 田淵晋也, 川上勉『ダダ・シュルレアリスムを学ぶ人のために』 [世界思想社 1998]
- 18) J=D・ナシオ『ヒステリー —精神分析の申し子—』 (姉齒一彦 訳) [青士社 1998]
- 19) ジークムント・フロイト『著作集 6 自我論・不安本能論』 (井村恒郎・小此木啓吾 他訳) [人文書院 1970]
- 20) ジークムント・フロイト『著作集 7 ヒステリー研究他』 (懸田克躬・小此木啓吾 訳) [人文書院 1974]
- 21) エティエンヌ・トリヤ『ヒステリーの歴史』 (安田一郎・横倉れい 訳) [青士社 1998]
- 22) ジークムント・フロイト『著作集 3 文化・芸術論』 (高橋義孝・他 訳) [人文書院 1969]
- 23) ジークムント・フロイト『著作集 2 夢判断』 (高橋義孝 訳) [人文書院 1968]
- 24) 岡野憲一郎『心のマルチネットワーク』 [講談社現代新書 2000]
- 25) ヘンリ・F・エレンベルガー『無意識の発見 (上)』 (木村敏・中井久夫 監訳) [弘文堂 1980]
- 26) ジークムント・フロイト『自我論集』 (竹田青嗣 編・中山元 訳) [ちくま学芸文庫 1996]
- 27) カール・H・プリブラム/マートン・M・ギル『フロイト草稿の再評価』 (安野英紀 訳) [金剛出版 1988]
- 28) ロジャー・N・ウォルシュ『シャーマニズムの精神人類学』 (安藤治・高岡よし子 訳) [春秋社 1996]
- 29) ミハーイ・ホッパー『シャーマニズムの世界』 (村井翔 訳) [青士社 1998]
- 30) ドナルド・リー・ウィリアムズ『境界を越えて シャーマニズムの心理学』 (鈴木研二 訳) [創元社 1995]
- 31) ピアーズ・ヴィテブスキー『シャーマンの世界』 (岩坂彰 訳) [創元社 1996]
- 32) 井筒俊彦『イスラーム思想史』 [中公文庫 1991]
- 33) 『イマーゴ 1996 vol. 7 - 8・特集＜ヒステリー＞』 [青士社 1996]
- 34) 『現代思想 1980 vol. 8 - 10・特集＜エクスタシーの哲学＞』 [青士社 1980]
- 35) 『現代思想 1984 vol. 12 - 7・特集＜シャーマニズム＞』 [青士社 1984]

(平成16年12月20日受理)